

朝焼けのマンハッタン

斎藤憐

◆登場人物

- 稲垣愛子 (アナーキーなお嬢さん)
稲垣幸次郎 (棄民の画家、愛子の夫)
田口光子 (外交官夫人、愛子の姉)
田口 恵 (アメリカに憧れる少女、光子の娘)
ヘンリー平井 (レストラン「櫻」のコック)
平井信代 (ヘンリーの母)
佐山 栄 (放浪の演出家)
陳 (中国人の家主)
鶴橋 (通信社の記者)

一幕

物語は全幕を通して、ニューヨークはマンハッタンのダウンタウンにある古びたアパートの最上階で語られる。

部屋の片隅のイーゼルには『失業音楽隊』のキャンバスが載っている。天井まである窓。その向こうにはできたばかりのエンパイヤー・ステート・ビル。

幸次郎 (正面を見て) あれが、自由の女神、あの光るのがハドソンリバー。大西洋を渡って来た移民たちは、全員甲板に上がって、霧の彼方にあの自由の女神を見つけて叫ぶんだ。おお、夢に見たアメリカに着いたぞおって……。

恵 ニューヨークはアメリカの玄関なのね。

幸次郎 あの、リバティ島の手前にあるのがエリス島。別名、涙の島。

恵 涙の島？

幸次郎 うん。イミグレーションの審査にパスしなかった家族を収容する移民局なんだ。

恵 審査に通らなかった人たちは、どうなるの？

幸次郎 また、ヨーロッパに戻されるのさ。

恵 もう一度、大西洋を渡って？

幸次郎 この四十年でどれくらいかの移民がああ港から上陸したと思う。

恵 ええと……百万人？

幸次郎 もっともっと。

恵 五百万。

幸次郎 二千五百万人だよ。

恵 (舞台奥を見て) エンパイヤー・ステート・ビル、こっちになるんだ!

幸次郎 四年前にできた時は目障りなもんじゃないと思っただが、エッフェル塔ができた時もパリ市民は怒ったというから、そのうち見慣れるでしょ。

恵 素敵。昨日、セントラル・パークのメトロポリタン美術館に行ったら、ジョットーからゴッホまで、イタリヤ・ルネッサンスからフランス印象派までの名画がずらりでしょ。

幸次郎 アメリカがお金持ちの時、ヨーロッパから買いまくったからね。

恵 (絵を見て) これ、今、描いてらっしゃる絵ですか?

幸次郎 うん、『失業音楽隊』っていうんだ。ディプレッションでミュージシャンたちも仕事が無くなってね。

恵 ディプレッション?

幸次郎 ナインティーン・トゥエンティナインにウォール街で株が大暴落してね、全財産を失った人達が毎日ビルディングから飛び下りた。

恵 ああ、ワシントンでもね、橋の下や道端に住んでる人がいた。

幸次郎 マンハッタンから出るフェリーで音楽をやっていた楽士たちも失業してね……。ね、この国で生きてくって楽じゃないよ。

恵 でも、叔父様たちは素晴らしいわ。日本人の絵描きさんが、外国で。それもニューヨークで認められて

る……。いいなあ、ヴィレッジの天井の広い最上階に愛の住家。……。ペンシルバニア・ステーションに降りたら、背中伸ばしてクツクツクツと風を切って歩いている女たち。ああ、ニューヨークだなあって。

幸次郎 ニューヨークの人口、爆発的に増えるわけだ。

恵 でも、ママは私に、ワシントンに帰れって言うんです。（幸次郎の手を取って）あんな所、嫌なんです。大使館なんて大嫌い。あそこはアメリカじゃないわ。箱庭みたいな日本村で毎日ブリッジなんかしちゃって。

幸次郎 （こわばったまま）このゴミゴミしたニューヨークの方がいいか？

恵 八番街のローマニ・カフェの蔭のからまる裏庭の木陰では、赤いズボンの男や一枚の布を体に巻きつけた女たち、思い思いの服装をした人たちが、生活を楽しんでいる。

幸次郎 ここらは、今はダウントウンだが昔は、ニューヨークの高級住宅地だったからね。ヨーロッパ風の建物がまだそのまんまだ。

恵 この境界が高級住宅地だったんですか？

幸次郎 そこへペストが大流行してね。ここに住んでたお金持ちは、みんなアップタウンの方に移っちゃった。

恵 ごちゃごちゃした道のはずれで夕涼みをしてるイタリア人。おデブの小母さんたちがイタリー語でわいわい言ってる。ここは、人間が住んでるのよ。

幸次郎 そう、お金持ちがいなくなった後に、安い家賃を目当てに貧しい移民たち、無名の芸術家たちがこのグリニッジ・ヴィレッジに流れ込んできたからね。

恵 ああ！

幸次郎 ……どうした。

恵 (下を見て) ママだわ。どうしよう。

幸次郎 ええ！ ワシントンから？

恵 前のデリカテッセンで道聞いて、今、上がって来る。

幸次郎 そのクローゼットはどうだ。

恵 (戸棚の戸を開けて入ろうとする) 駄目、とても入れない。(幸次郎の手を取り) 私、帰りたくないの。叔母様からママに言って欲しかったんです。

幸次郎 あなたのママは、妹さんの言うことなんか聞きやあしないよ。

恵 じゃあ、パパに叔父様から。

幸次郎 もっと駄目、僕はぜんぜん信用ない。

そこでブザーが鳴った。

恵、寝室に逃げ込む。

幸次郎、あわてて、パイプに火をつけてあわててドアを開ける。

幸次郎 (オーバーに驚いて) ああ、光子さん！ びっくりした。

光子、じっと幸次郎を見る。

幸次郎 あ、愛子は今、ちょっと出掛けてます。

光子 (部屋を見回して) 愛子は、素晴らしいフラットを借りたって書いて来たけど屋根裏部屋じゃないの。エレベーターなしで六階だもんね。

幸次郎 五階ですよ。

光子 こっちがキッチン？ それで？ (と、寝室に行き掛ける)

幸次郎 ああ、お茶をお入れしましょう。

光子 結構よ。

幸次郎 ご主人、忙しいんでしょうね。まあ、支那の戦がああですから、日米の関係も……。外交官というのは大変だろうなあ。

沈黙。

恵、そっと寝室のドアを開けて顔を出す。

下の部屋から、ピアノが聞こえて来る。

光子 このアパート、楽隊なんか住んでるの。

幸次郎 真下の部屋なんですがね、ナイト・クラブ首になったようです。ああ、この先に、おいしいコーヒーを飲ませる店があるんですが……。

光子 結構。

幸次郎 (突然) マーク・トウエンの住んでいたところ、近くなんですよ。

光子 ……。

幸次郎 お嬢さんとまだ連絡つかないんですか？

光子 稲垣さん。

幸次郎 はい。

光子 あなた何か隠してない？

幸次郎 い、いいえ。

そこへ、ブザーの音。

光子 あ、帰って来たかな。

光子がドアを開けると、中国人の陳さん。

恵、寝室から顔を出す。

陳 コンバンワ。

光子 今日は。

その間に幸次郎は、ベランダへ逃げ出した。

光子 あら？ 稲垣さん！ (陳さんに) ソーリー。稲垣さん。

陳 アノヒト、エスケイプ、シタネ。

光子 エスケイプ？

陳 イナガキサン、ヤチン、ハラエナイ。ソレデ、ニゲマシタ。

光子 何か月、お支払いしてないの！

陳 モウ、スリーマンズ、ハラツテクレナイ、陳サン、コマルヨ。

光子 それはいけないわね。

恵、ベランダに逃げ出す。

陳 アイコサン、オシゴトカ？

光子 そうらしいわね。

陳 デハ、チンサン、マタクルヨ。

光子 御免なさいね。

去って行く。

光子 (寢室のドアをノックして) もしもし、お客様お帰りになりましたけど。

光子、寢室のドアを開けて中を見る。

それから、外に耳をすませてクローゼットの引き出しを開ける。

その時、階段で足音がするのであわてて、閉める。入って来たのは疲れ切った愛子。

愛子　なんだ、姉さん。どうしたの？

光子　どうしたのって、恵ったら今日で五日目になるのよ。しばらく旅に出ますなんてメモ残して……。

愛子　それは心配ねえ。

光子　電話もなあい。

ベランダから恵、愛子にサインを送る。

愛子　クラス・メートのところなんかじゃない。

光子　（首を振って）あの子、アメリカに来てまだ半年。英語だってまだまだ……。ここじゃなけりやどこだろう。

愛子　戻って来るわよ、一週間もしたら……。

光子　そうよ、ろくにお金も持ってないのよ。ここらあたりの道、ゴチャゴチャしてて、まるで東京だね。

愛子　連絡してくれば十四丁目まで迎えに行ったのに。

光子 電話したら、あの子が、逃げ出すと思ってね。どうなの、あなたの方は？

愛子 元気よ。ご覧のとおり。これ、見て。(と、新聞を出して来る) A C A画廊の個展の批評よ。

「この十年に起こった社会的事件を題材にした力作が多い」ニューヨーク・タイムズ。「イナガキの作品は社会的なドラマに貫かれている。しかし、彼の絵は美的デザインに満ち溢れ、いわゆる政治主義絵画ではない」ヘラルド・トリビューン。それからね……。

光子 もう結構。手、見せてごらん。

愛子 ？

光子 さあ、手を貸しなさい。(と、取る) あああ、こんなガサガサになって。

愛子 ちよっとお。(手を引っ込める)

光子 これが、幸せな奥さんの手？ 今、売りだし中の絵描きさんのワイフの手？ このフラットの家賃、幾らなの？

愛子 家賃の事なんかいいでしょ。

光子 ひと月幾らなの？

愛子 十八ドル。

光子 ねえ、この家、忍者屋敷なの？ あなたの同居人、どっかに消えちゃった。

愛子 ああ、そのベランダ、隣のビルの屋上に一跨ぎ。高架電車の駅に行くには、東に出た方が近いもんだから。

光子 さっきここに来たチャイニーズ、家主さんでしょ。家賃の催促に来たわよ。

愛子 先月売れた絵のお金が向こうの都合でちよっと遅れて……。

光子 嘘、おっしやい。(と、戸棚の下の引き出しを開ける) お米、明日の分もないじゃない。戸棚には

ベーコンが二切れと野菜屑。

愛子 ああ、そろそろ買わなけりやあと思ってたの。

光子 (お金を置いて)これ、とっときなさい。

愛子 ……。ありがとう。借りとくわ。

光子 こんな絵、売れないんだらう？

愛子 一流会社の社長さんが道端でリングゴ売ってる時代だから。

光子 お部屋に掛けたくなるような絵なら、お友達紹介できるけどねえ。(溜め息をついて) 暗いもの。

どうやって食べてるの？

愛子 三十三丁目の町工場で毎日ランプシェード縫ってる。一個一セント。一時間に六十個。週に十八ドル。

恵、そつと出て来るが引つ込む。

そこへ佐山がベランダから入って来る。

佐山 いや、隣のビルと屋上がつながっているというのは便利だ。警察のガサ入れがあっても逃げられる。

ボンジュール、マダム。コマンタレブー。(光子を見て) おっ、これは失礼。

愛子 姉さん、演出家の佐山さん。

佐山 ああ、お姉様ですか。今日はワシントンから？

光子 愛子の姉です。日本でお芝居をなさっていらしたのですか？

佐山 日本で芝居がなされなくなって、逃げて参りました。ワツハツハツ。お姉様といいますと、メグさんのお母様？

愛子、あわててサインを送るが間に合わない。

光子 あなた、恵をご存じ？

愛子 あ、あのね。

光子 愛子！ あんた！

愛子 隠していて御免。

光子 あんたたち、グルなんだね。

佐山 ま、ま、ま。あのですね、お嬢様が絵の勉強をなさりたいと言うならば……。

光子 あの子に変な夢見させないでください。

佐山 お嬢さんを、今の日本に帰すなんておやめになった方がいい。暗いですよ、町も人間も暗い。去年の

夏、サンフランシスコで船を降りたら、こぼれるばかりの陽射しの中で人々が笑いながらハンバーガーを食べてる。路面電車の車掌が、笑いながら僕を車内に引きずりあげてくれた。その時、ああ、人々が生活を

を楽しみながら生きている国もあるんだって思いましたね。

光子 他人は、無責任なこと言わないで。

その時、ベランダの向こうでガラスの割れる音がする。
恵が、悲鳴を上げて駆け込んで来る。

光子 恵！

そこへ、暖炉の火かき棒を持ったヘンリー「こらあ！」と恵を、つかまえる。

ヘンリー この売国奴！

恵 痛い！

ヘンリー 稲垣愛子、逃げるでねえ！ この女！（と見て、びっくりして）あ、あなたは……。

恵 なにすんのよ！

ヘンリー は、はい。

佐山 あんたは稲垣愛子さんにご用ですか？

ヘンリー ええ、まあ。

愛子 なんのご用でしょう？

ヘンリー あ！ おまえは昨日晩きのうばん、サウスフェリーの埠頭で、演説しとったじゃろうが。あの船に積んであ

る鉄屑あ日本に行って爆弾になり、中国のピープルの頭の上に降るんです。そう言うたじゃろう。

愛子 言ったわよ。

ヘンリー ええか、日本はな、貿易せんと生きていかれん国なんじゃ。アメリカに沢山、買って貰おう思う

て、日本人はひどく頑張るとんじゃ。

愛子 まあ、ゆっくり話しましょう。

ヘンリー おめーらあ、日本人じゃろうがあ。日本人が、日本の悪口言うて、恥ずかしゅうねえん！

佐山 おめなあ。

ヘンリー なんじゃ？

佐山 おめんちと日本と、どっちが大事てえしにせにやいけんの？

ヘンリー わしんちと、日本か……。どっち言うて……。

佐山 おめえんちは備中のどこじゃ？

ヘンリー 高梁だ。

佐山 水飲み百姓が食い詰めて、アメリカに逃げて来たんじゃろうが。

ヘンリー ……。

佐山 このアメリカで何を仕事にしとるんじゃ？

ヘンリー 十六丁目の「櫻」ってレストランでコックやっとる。

佐山 聞けばてめえも土地っ子じゃねえだろが、さだめし故郷恋しの心はあろう。

ヘンリー？

佐山 胸には焼けつく火の熱さ、この空と水をじっと見てりやあ、備中の高梁川が目の中に沸いて来る。俺

もなあ、三里が先を江戸の空と定めて、ここでいつも毎日海の向こうの空を見ているんだ。（肩を抱い

て）なあ、故郷から一万五千キロ離れた異国の港町、肩寄せ合って生きてるもん同士が、なんで傷つけ合

わなきやなんねえんだ。

ヘンリー ……。

愛子 (救急箱を持って来て) あんた、手え、血が出てるよ。

ヘンリー なもん……。

愛子 そら、床に垂れてる。メグ、手伝って。

恵 ああ。(と、脱脂綿で血を拭く)

ヘンリー こねえなもん……。イテテテ。

佐山 ガラスが入ってるとことだよ。

愛子 駅の裏手に診療所があるから。

佐山 ああ、チエコから来たあのドクター。よし、俺が連れて行ってやる。

ヘンリー よござんすよ。

愛子 さ、急いで、急いで。

佐山 お帰りはこちら。

佐山、ヘンリーを連れて玄関から去る。

沈黙。

恵 ああ、びっくりしたあ。

光子 メグ!

恵 はーい。ごめんなさい、ママわかって。私、ニューヨークで絵の勉強したいの。

光子 駄目です。あなたは日本に帰るの。日本で教育を受けさせます。パパの意見も同じです。

愛子 日本の教育なんてろくなもんじゃないわ。

光子 愛子！

愛子 はーい。

光子 ニューヨーク港の貨物船の前で「日本の支那侵略に手を貸すな」って演説あそばしたのが自分の家族だとは知らなかったわ。

愛子 でも、それは事実でしょ。満州国を世界中が非難してるわ。

光子 愛子。あんたはね、日本国の外交官の家族の一員として入国してるのよ。ところがその外交官の赴任地で、母国の対外政策を誹謗している気になってるお嬢様がいらっしやる。気違い沙汰よ。

愛子 じゃ、姉さんは、今の日本がやってることいいと思ってるの。

光子 今の日本でそんな演説したら監獄行きだよ。あんたはこのアメリカっていう安全な場所において偉そうなこと言ってるお嬢様。あんた支那友の会とか、アグネス・スメドレーなんかと付き合うのやめなさい。

愛子 スメドレーは支那のことを一番愛してるアメリカ人よ。

光子 支那共産党に入れ上げてる馬鹿な女よ。……ニューヨークにジョン・リード・クラブって日本人の無頼漢たちがいるって聞いてたけど、あんたの家が巣窟とは知らなかった。

愛子 無頼漢て言い方はないでしょう。

光子 そう？ あの佐山栄って演出家、牢屋に入れられていたんですよ。

恵 (うっとりして) あの人、悪者なの？

愛子 馬鹿ね。戦争に反対する劇をやって捕まったのよ。

光子 あの人の奥さんの平野郁子って女優も共産党。あの人の、何しにアメリカに来たのか知ってるの？

愛子 だから、日本ではお芝居が弾圧されて……。

そこへ、荷物を抱えた佐山、ベランダから戻って来て立ち止まる。

光子 ベルリンへのビザが下りたところ。

愛子 ベルリン？

光子 あの男はね、ベルリンからモスクワへ入ろうとしてるんだよ。

愛子 モスクワ……。

佐山 (入ってきて) 日本大使館の情報収集能力には頭が下がります。

その時、聖パトリック教会の鐘が鳴る。

光子 ああ、もう、こんな時間。

愛子 ペンシルバニア・ステーション何時？

光子 六時。(逃げ出す恵に) いくら隠れたって、大使館はあなたを国外退去処分にするんですからね。
恵 ……。

佐山 (勘違いして) は、分かっております。どうぞ、お目こぼしを。

愛子 今夜、どっかホテル取れば？

光子 そうはいかないの。メグ、二、三日、ニューヨーク見物したら帰って来るんだよ。（ハンドバッグから何がしかのドルを出し）これ、下宿代。

愛子 いいのに……。

光子 あんたも先のこと考えなさい。

出て行く。

恵 いつも、あれなんだから。話し合ってもものができないのよ。

愛子 あの勇ましい青年、どうした。

佐山 あの馬鹿。医者の前でヒーヒー泣きやがる。

恵 ニューヨークってやっぱりおもしろい。いろんな人がいるんですもの。

愛子 デイブレーションさえなかったらね。メグ一人ぐらい……。

佐山 経済恐慌を災害のように言いなさんな。資本主義の必然の末路です。欧州の戦争でアメリカは大儲けした。ところが底無しの不景気が始まり失業者が出る。一番弱い外国人労働者から職を失う。そのとばっちりです。ちりで日本も物凄い不景気だよ。

恵 私、日本に帰るなんて嫌。

愛子 メグ、アメリカで日本人が生きていくって大変よ。

佐山 日本に帰るなんてよせ。嫌な国になったよ。筋を通した小林多喜二は殺され、この弱虫の佐山栄は亡

命者になりました。

愛子 幸さん、今日、何をしに出掛けたと思う。美術家同盟にキャンバスを貰いに行ったの。

佐山 キャンバス？

愛子 同盟の倉庫にね、道楽絵描きの名画が積んであるの。人の絵をホワイトで塗り潰してね。

佐山 他人の絵の上に絵を描く。ニューヨーク・タイムズで絶賛された画伯がキャンバスも買えんか。

愛子 あの人の絵、二百号、三百号でしょう。

佐山 ……芸術家はその芸術を商品としなければならぬ国に住むのは辛いもの。

恵 絵描きさんは絵を売って生きて行くものじゃないんですか？

佐山 そうでない国もある。ソヴィエト・ロシアだ。

恵 絵を売らないでどうやって生きていけるんですか？

佐山 芸術家は民衆に奉仕する任務を持っている。だから、国家が保護してくれるんだ。

恵 それで小父様はロシアに行くのね。

愛子 佐山さんの門出を祝って、ささやかな祝宴を開きますか？

佐山 よし、今日は僕が奢ろう。どうだい、今からチャイナ・タウンにでも繰り出そうじゃないか？

愛子 幸さんがまだだから……。

佐山 そうか。

愛子 メグ。ベジタブル・ショップの先にソーセージ売ってる店があるから、行って来て。(光子の金を渡

して)これ使っちゃおう。

恵 賛成。

佐山 よし、僕も義捐金を出そう。

恵、「行って来ます」と出て行く。

愛子 さっきのはなんて言うお芝居の科白？

佐山 『刺青奇遇』いれずみちようはんだがね。金稼ぎで引き受けた仕事だったからうろ覚えさ。

愛子 「シアター・アーツ」の日本現代演劇の紹介、読ませてもらったわ。

佐山 ホッホッホッ。

愛子 すごいわね。アメリカに来て十カ月。あんた語学の天才。私なんか、もう十年になるのに、まだ苦勞してる。

佐山 ご亭主、遅いね。

愛子 帰りに、ヘーゼル女史とランデブーでしょう。

佐山 おもしろい夫婦だ。

佐山、愛子に近付いて、抱く。

愛子 嘘つき。

佐山 嘘はついたつもりはないけど。

愛子 ロシアにはいつご出発？

佐山 来週の金曜日にルアーブル行きの船が出る。

愛子 それを隠して、三日にあげず会いに来て……。

佐山 人生は永遠じゃない。君とこうしている一時は、もう二度とかえって来ないかけがえのない一瞬だ。

愛子 それはなんて言う芝居の科白？

佐山 私のオリジナルです。

愛子 郁子さんには、何て言って逃げて来たの？

佐山 僕の代わりに日本の芝居を守れて言い残して来た。

愛子 あん時、アメリカに落ちまってよかった。でなかったら、今頃、私が日本に置いてけぼりされてる。

私には、なんて言い残すの？

佐山 来たければ、モスコイまでついて来てもいいんだよ。

沈黙。

佐山 今、モスコイに入ったら、一生日本には帰れないがね。

愛子 ……。

佐山 楽しかったよ。君のお陰で、一週間のつもりが十カ月もこの街に長居しちまった。

愛子 嬉しいこと言ってくれるわね。

佐山 だから、残る日々を大切にしたい。

二人、見詰め合ったところへ、ブザー。

佐山 奴はいつだって、登場のきっかけが悪いんだ……。

幸次郎 (入って来て) 水をくれ。

愛子 はいはい。佐山さんねえ、ロシアに行くんですって。

沈黙。階下からピアノ・バラードが聞こえて来た。

幸次郎 ほう、チエーホフですか。

佐山 君は『紐育新報』に「ロシア近代派」という原稿を書いたそうじゃないか。

幸次郎 うん。タトリン、カンディンスキー、ペブスナー。革命後のロシア画壇はきら星のごとしだ。

佐山 ロシアじゃあ、政治の革命とともに、芸術の革命が進んでいます。構成派と言ってね。今、あらゆる芸術分野で、写実主義を超えた表現の試みが進んでいる。文学ではエレンブルグ、詩ではマヤコフスキー、

演劇ではメイエルホリド。

愛子 メイエルホリド？

佐山 僕は彼からリアリズムと違った新しい表現方法を学んできます。(風呂敷を出して) ああ、これロシ

アに持ち込めないから……。

幸次郎 なんだい？

佐山 (風呂敷をほどいて) ショート・ウエーブだ。

幸次郎 これは、これは。

愛子 万歳。ベルリン・オリンピックだったって聴けるわ。

そこへ、玄関から恵とヘンリーと鶴橋。

鶴橋 大丈夫だって……。みんな優しい人たちだから。

佐山 おお、どうした、備中の桃太郎？

ヘンリー やっぱり俺……。

恵 下の入り口の所でうろろうろしていたから。

鶴橋 今晚は。

佐山 おう、なあ新聞屋。アジアの貧しい島国じゃあ青年将校の反乱以外なんかあったかね？

鶴橋 阿部定って女が、愛人を自分のものにしたって大切な一物を切り取りましてね。

幸次郎 ええ！ 怖いねえ。

鶴橋 それから内務省がメーデーの集会を禁止しました。

佐山 帝都の五月の空にインターナショナルの歌声は響かずか。

恵 なあにインターナショナルって？

鶴橋 あの「立て、飢えたる者よ」って奴ですよ。

愛子 この世界から国境をなくして、世界を一つにする。それがインターナショナル。

鶴橋 こちらの先生がその日本語訳お付けになった方ですよ。

佐山 おい、コックなら、宴会の用意をしろ。

ヘンリー はあ。(オズオズ入って来る)

恵 駄目よ、手え怪我したコックなんて、役立たずだわ。

ヘンリー いや、手伝わしてくだせえ。

恵 この人、先月ウエスト・コーストに母さん置いてこっちに来たんですって。

佐山 お嬢。まずは家族のしがらみを断ち切らなきゃあ、国境なんぞ越えられないぞ。

愛子 (幸次郎に) ねえ、ロシアに行こう。あっちじゃあキャンバス買うのに苦勞する芸術家なんていないんだって。

幸次郎 キャンバスなんかもういらないんだ。ローズベルト万歳だ。

愛子 どうしたの？

幸次郎 公共事業……促進局がね、百二十一丁目のハーレム裁判所に絵を描いてくれて。

鶴橋 あなたにも、その話、来ましたか。

幸次郎 そうなんだ。

愛子 裁判所のどこに？

幸次郎 建物の外壁に、縦二メートル幅三・六メートルの画を描くんだそうだ。

佐山 壁画か！

幸次郎 ニューディールの一環でね、芸術家の力を集めようって言うんだ。

佐山 すごいじゃないか。これからは壁画だよ。今までの絵画は、金持ちの邸宅の壁を飾るためにあった。

我らが二十世紀の絵画は、小さなサロンの壁から解放たれ街頭に出て行く。私有されるものではなく、

大衆のものになる。メキシコのリベラやオロスコは早くから壁画の仕事をしているんだよ。

幸次郎 リベラはロックフェラーセンターの担当です。

佐山 オオ、ビバ、メヒコ！

幸次郎 僕に与えられたテーマは『アメリカの独立』と『奴隷解放』だそうだ。

愛子 すごい！ 乾杯だね。（キッチンへ）

恵がグラスを配り、ヘンリーが皿を出し、階下でピアノが鳴り出した。

佐山 おい、お嬢。隣のビルに部屋が一つ空くぞ。月に十五ドルだ。

恵 たったの十五ドル。安い！ よし、借りた。

鶴橋 （注いで）この国に、禁酒法とやらがなくなって助かりましたね。

佐山 この十年、酒飲みには辛い時代でした。

鶴橋 密造酒はこっそり夜作るだろ。だから「ムーンシャイン」って言うんだ。

愛子 じゃ、お月さまに乾杯しましょう。

佐山 あの自由の女神の台座にや、なんて書いてあるんだっけ。

愛子 「世界の自由を求める人々、貧しい人々よ、この国へ来れ。様々な国でクズと呼ばれ、家もなく嵐に

もてあそばされる人々に私は松明を掲げよう」

幸次郎 我らよそ者までをも、優しく迎えてくれるユナイテッド・ステーツの栄光のために。

佐山 おいおい、若者たちも来い。この世界に人類が夢見て作った人造国家が二つ。アメリカ合衆国とソビ

エト連邦だ。されど今宵はマンハッタンの夕餉。とりあえず、ビバ、ローズベルト。ビバ、アメリカ。愛子 どんなに辛いことがあっても、アメリカはいいわ。

乾杯の姿のまま、静止し、音楽だけが残った。

2

イーゼルには、制作途中の『キューバ島の反乱』が置いてある。ストーブの煙突を組み立てているヘンリーと手伝っている恵。

ヘンリー 移民局の役人に追い詰められた親父は、船の甲板からザブーン。

恵 サンフランシスコの港で？

ヘンリー そうさ。頭にありつただけの荷物をゆおうてのう。もう一本。

恵 (針金を渡した) ヘンリーのパパは、この国に密入国したんだ。

ヘンリー そう。オレゴンの大陸横断鉄道の人夫千人の募集があつてのう。アメリカで、宝くじに当たりや大金持ちになるちゆう噂聞いてな。早い話がうちの親父は船会社に騙されたんじゃ。

恵 岡山からの移民なの？

ヘンリー ああ。日給一ドルで支那人の材木商に雇われてな。せえから、ウエスト・コーストのイチゴ農園を転々としたんじゃ。よし。いよいよ、火を入れます。(紙屑を入れる)

恵 叔父様！ ストープつきましたあ。

幸次郎の声 ほーい。ほーい。

ヘンリー しかし、ニューヨークが零下二十度になるなんて思やせんかったなあ。

幸次郎 (オーバーオールを着て出て来る) おう、ご苦労、ご苦労。セコハンとは思えんな。

恵 ヘンリーのパパとママはカリフォルニアで知り合ったの？

ヘンリー まさか。フォトグラフィ・マリッジ言うてな。

幸次郎、ストーブに薬罐をかけた。

恵 写真の結婚？

ヘンリー 日本から出稼ぎに来るのは男ばかりじゃろ。じゃと云うて、日本に嫁探しに帰る旅費^{けえ}だって馬鹿にならん。そんな、相手から送られて来た履歴書と写真を見てな、お見合いの代わりにしたんじゃ。

恵 一度も会わないで旦那さん、決めちゃうの！

幸次郎 そう。じゃけえ、若い頃^{こん}の写真送ったり、自分はバラックに住んでるのにでっけえボスの家の前でこげな風にいばって写真撮ったり。

恵 それ詐欺じゃない？

幸次郎 船を降りて初めて実物の旦那に会って、泣き出した花嫁もたくさんいたってさ。(台所へ行く)
ヘンリー おっ母は港へ迎えに来た親父見て、ひでえお爺々と思うたんじゃやて。

恵 ねえ、やっぱり奥さんは日本人の女性がいいわけ。いないんなら、アメリカの女の人と結婚すればいい

じゃない？

幸次郎 (コーヒーのセットを持って) 南西部の州には雑婚法って法律があるの。
恵 ザツコンホウ？

ヘンリー (金槌で机を二度叩いて) カラードは白人と結婚しちゃあおへん。

恵 カラード？ 黒人だけじゃなく日本人も、有色人種なわけ？

幸次郎 日本人とチャイニーズもな。このままほっといたら、アメリカ人がみんな黄色くなっちゃう。
ヘンリー せえで、ステイツは支那人の移民を禁止してよ。

幸次郎 その後に日本人がやって来たんだけどね。日本人は命がけて働くから、どんどん収穫をあげて、こ
ちで生まれた子供の名義でキャリフォルニアの土地を買ったんだ。

ヘンリー わしらのようなアメリカで生まれた移民の子は、アメリカ人じゃけえ地主になれるんよ。

恵 ヘンリーはアメリカ人なんだ！

幸次郎 そこで、写真結婚も禁止。

ヘンリー そう。赤ん坊さえ生まれんと、日系アメリカ人は増えんもんなあ。

幸次郎 おお、火が消えるぞ。

恵 私の部屋にスケッチの描きつぶしが山ほどある。

恵、ベランダから出て行く。

幸次郎 さて、コーヒー、一杯飲んででかけるか。

ヘンリー　こんなに寒い日に仕事するん？

幸次郎　……。

ヘンリー　わしゃ、先生が出稼ぎでこっちに来なすったなんぞ思いもせなんだよ。

幸次郎　メグに聞いたのか。

ヘンリー　てつきり、カレッジに留学なさったんじやと思うとった。お国はどこですけえ？

幸次郎　和歌山のな、太地。鯨取りで有名な所だ。船大工だった親父が、キャリフォルニヤに働きに來たのは明治四十六年。時々珍しい切手貼った手紙が來た。

ヘンリー　へえ。

幸次郎　十六になった時、その親父に呼ばれてね。……最初に働いたのはシアトルの材木工場。それからレストランの皿洗い、自動車の修理、ホテルの掃除人夫。

ヘンリー　そんじやあ、こっちで絵の勉強しなすったじやなあ。

幸次郎　親父はいくらか金も溜まったんで日本に帰ったが、僕は残ってハウスキーパーやりながら、夜間学校に通ってね。

ヘンリー　先生は凄いなあ。日系人がアメリカの裁判所の壁に絵描いとるんじやろ。

幸次郎　君たちの時代になれば、こっちで活躍する日本人はもっと増えるさ。

ヘンリー　先生。

幸次郎　なんだ？

ヘンリー　メグさん、日本に帰しちまうんか？

幸次郎　ああ、ここで勉強させてやりたいがね。

ヘンリー ……この街で初めて友達ができたちゆうに残念じゃ。

幸次郎 支那との泥沼の戦争に入った日本なんかに帰したくはないが……。

恵が、画用紙の束を持って入って来る。

恵 ほら、こんなに沢山。

幸次郎 ずいぶん描いたね。ちよっとお見せ。

恵 見ていただくようなものじゃありません。(ストーブの横にドサツ)

ヘンリー ええ、燃やすんか。じゃったらこれわしにくだせえ。

恵 (ストーブに紙をくべて) 嫌よ。残しといたら恥ずかしいもの。

幸次郎 メグ、砂糖、あつたかな。

恵 はい。(と、台所へ)

ヘンリー (見て) ああ、セント・パトリック教会だ。これ記念に……。

恵の声 駄目よ。

ヘンリーが選んだ絵を幸次郎が取ろうとして、二人争う。

そこへ、「ただいま」と愛子。

愛子 お、煙突、付いたな。こりゃあ、ご隠居のお宅は暖かいのう。

幸次郎　八つあん。寒かったろう。我慢しろ。もうすぐ皮のブーツを買ってやらあ。

愛子　ご隠居、吹きさらしの壁画の現場も寒かろう。

幸次郎　馬鹿言っちゃあいけねえ。こちとら紀州の海で鍛えた体、なんのこれしき……。

愛子　だいぶ、乗ってるわね。

幸次郎　ああ、今日から『奴隷解放』に取り掛かるんだから。これが下絵だよ。

ヘンリー　エブラハム・リンカーンじゃな。

幸次郎　ジョージ・ブラウンも描くんだ。

とコートを着ながら、恵の絵の一枚をそっとキャンバスの後ろに隠す。

幸次郎　リンカーン一人が黒人たちを救ったっていうのは白人たちが勝手に作った物語さ。

ヘンリー　わし、下で燃料、見つけてくるけえ。

恵　「僕持って来ますから」でしょう。

ヘンリー　ボク、来ますから……。

幸次郎　よし、一緒に行くか。

幸次郎とヘンリー、出て行く。

恵　叔母様。私、どうしても日本に帰らなきゃあならない？

愛子 でも、パパとママは今度日本に帰るんだから。

恵 叔母様。ママを説得して。私、ここで勉強したいの。日本になんか帰りたくないの。アート・スチューデント・リーグだって、三年は通わなけりゃ、デッサンだってまともにできやしないもの。

愛子 (絵を見て) そうね。

恵 ニューヨークがいいの。スケッチ・クラスでね。まっすぐに線も引けないような人がいるの。でも、その下手くそなデッサンが強いなの。

愛子 そりゃあ、この国じゃあ、子供の時から自分を主張するように育ってるから。

恵 日本じゃあ、まず技術、それから自己主張……。いやなのよ。みんな型に嵌められて。

愛子 コーヒー入れてくれる。

恵 はーい。(と台所へ)

そこへ、ブザー。

陳 グッド・モーニング。

愛子 ああ、陳さん。シャワーの具合が悪いんだよ。

陳 ワカッタ。デモ、ナンカ、お客ダヨ。(表に) プリーズ、カムイン。

入って来たのは、やたら荷物を担いだ平井信代。

信代 ハーイ、ハウドウユードウ。

愛子 ハーイ、ハウドウユードウ……。

信代 アイアム、ミセス、ヒライ。(と荷物を置く)

愛子 アイアム、アイコ。アンド……。あの、どちらさんですか？

信代 (ジロジロ愛子を見て) そうか、あんたじゃったんか。いい年してから……。

愛子 ？

信代 うちの子を返^{けえ}しておくれ。素直ない子じゃったけどなあ。せえが、何べんレター出^{てえ}しても、戻^{かえ}ってきやせん。

愛子 ねえ、陳さん、この人どなた？

陳 シーセツド、デイス、エリヤニ、ジャパニーズ、スンデナイカ。

信代 汽車にスリーデイズ乗って、デイスモーニング着いたけどビッグな町じゃなあ。

愛子 どこをお尋ねです？

信代 (手紙を出す) ええと、グリニッジの……。

恵 (コーヒーを持って出て来て) どうしたの？

愛子 ねえ、三十二番地って言う……ヘンリーのところ辺り？

信代 イエース！ ヘンリー。マイ、サン！

恵 ええ、サクラメントのママですか。

信代 (恵を見て) 今日は……。

恵 恵です。

信代 ユーがヘンリーとお付き合いしとるかの？ ハハハハ。そうじゃなあ（と愛子を見て）なんぼなんでもねえ。

陳 オオ、ミステイク。

信代 この支那人ポコペンが。イングリツシュできんくせして。

愛子 まあ、お座りください。

信代 ったく、支那は、戦もへっぴり腰なら学問もねえんじゃけん。

陳 シヨウネン、オイヤスク、ガク、ナリガタシダヨ。

信代 あんた、日本語、でけるん。

陳 ワタシ、ワカイトキ、ホツカイドウデ石炭ホツテイタヨ。

そこへ「お待ちどうさん」と古材をかかえて、ヘンリー。

ヘンリー まあ、手始めにこのくれえ。

信代 ヘンリー！

ヘンリー ああ、母さん！ どねえしたん？

信代 どねえしたってお前、^{めえ}イースト・コーストにちよつと行って来るけえよ言うて。

ヘンリー じゃけえ、レター、出したじゃろうが。

信代 出したろうって、パパが死んで、ユーノー、わしやロンリーウーマンじゃけなあ。

ヘンリー じゃけど、ウエスト・コーストじゃ、日系人は苛められどおしじゃけ。

信代 じゃちゆうてママを一人で置いてくこたあなかるうが？

ヘンリー もう、ええ。さあ、わしのアパートに行くでえ。

信代 ちよっと待ちねえ。(とヘンリーにゴソゴソ)

愛子 陳さんが見つけてくれたストーブついたよ。

陳 ホッホッホー。ウン。陳サン、バックヤードで石炭ホッテコヨウ。

愛子 ええ、マンハッタンで石炭採れるの？

陳 ハハ、チョーダン、チョーダン。工場の倉庫カラ、チャバツテクルネ。再会！(出て行く)

愛子 (背中に) ツアイチェン。

信代 (ヘンリーを振り切って) ねえ、恵さん。

恵 はい。

信代 ユーは、ヘンリーのワイフになってくれんかなあ。

恵 ええ！

ヘンリー 母ちゃん！

信代 頼んでえ。この通りじゃ。せえともあんたヘンリーのこと嫌つとるんか？

ヘンリー ちよっとちよっと、失礼じやろう。

信代 結局、この国の日系二世はなあ、みんなワイフがおらんで困つとるじゃがなあ。ねえ、ママさん。

愛子 いえ、私はこの子の母親じゃないんです。

信代 ああ、そうなん。じゃあ、お母さんに頼もう。どけえ住んどられるんかなあ。

愛子 残念ですけど、この子は来月、日本に帰るんです。ですから……。

信代 あっそうなんか。ユー、ゴバツク、ジャパンなんか。そりゃキャナットじゃのう。(恵に) あのなあ、あんだ、他にやお知り合いとか日本のガールさん、おらんかな……。少しや器量が悪うてもこらえるがなあ。

ヘンリー ちょっと、母ちゃん。行こう。

信代 そうかい。また来るけんな。バイバイ。

と、荷物を持って信代、出て行く。

愛子 ああ、びっくりしたね。

恵 お父様が亡くなってサクラメントで雑貨屋さんやってるんだって。

愛子 それなのに息子はニューヨークに憧れて……。

恵 もしもよ。もしも私がアメリカ人と結婚したら私、アメリカ人になれるの。

愛子 そりゃあなれるでしょ。

恵 そうすれば、ビザなんかいらさない？

愛子の声 そりゃあ、アメリカ人になればね。

恵 ねえ、相手がカラードならアメリカ人でも雑婚法にひっかからない。

愛子の声 あんだ、カラードで好きな人できたの？

恵 カリフォルニアで生まれた人はアメリカ人でしょ。

愛子 そう。だから日系人たちは……。ええ、ヘンリー！

恵 いけない？

愛子 いけなかないけど、あんた、アメリカに永住するためにアメリカ人と結婚するなんて……。
恵 いろいろ考えたんだけど……。

沈黙。

愛子 あの人、お紅茶のカップにスプーン入れたままで飲むものって言ってたじゃないの。

恵 そんなこと言ったら、幸次郎叔父様だって移民の子供でしょ。

愛子 あんた私に似て苦労するね。

恵 うん、それ考えるとね……。

愛子 やんなさいな。ヘンリーと一緒に苦労しなさい。

恵 ママ、なんて言うかな。

愛子 駆け落ちしなさい。二人でカリフォルニアでもなんでも逃げちゃいなさい。

そこへ、ブザーの音。

恵 ああ、ママだわ。

愛子 とにかく、そこから行ってヘンリーと話し合って頂戴。

恵 うん。そうする。

恵、ベランダから出て行く。

光子 (入って来て) 早くエレベーターのあるビルに引っ越して頂戴な。

愛子 姉さん、日本に帰るなんて残念ね。

光子 それより、あなたの方はどうなの？

愛子 幸次郎さんは裁判所の壁画チームの主任よ。週給三十五ドルだけど。半年がかりで『アメリカの独立』を仕上げて、これから『奴隷解放』に取り掛かるの。

光子 まだ、ペンキ屋やってるの。

愛子 ……。姉さん。

光子 うん？

愛子 ねえ、メグをもう少し、ニューヨークに置いとかない。

光子 駄目です。ずるずるずる延ばして。

愛子 もう少し、勉強させたいのよ。

光子 いいえ、来月の船で連れて帰ります。

愛子 あの子の夢、叶えさせてやりたいのよ。

光子 私はね、メグにあなたみたいになって欲しくないの。夢を見るのはいいわよ。キリストの愛を貧民街で実践している賀川豊彦先生に共鳴して、自分も労働者とともに生きるんだって家を飛び出して、大阪行きの汽車に飛び乗って……。ところが、貧民街の湯船の底にはドヨンと泥が溜まっている。あなたはど

うしてもそのお風呂に入れないで、翌日にはお父様の家に逃げ帰って来た。

愛子 子供の頃のことなんか持ち出さないでよ。

光子 それからだって同じ。内村鑑三のお次がサンガー夫人。そしてやって来たアメリカでルンペン絵描きにつかまってダウンタウンで一つ一セントの内職。

愛子 今は、モデルの仕事してるのよ。一時間で一ドル。裸じゃないのよ。

そこへ、ブザー。

光子 あなた、モデルの仕事するためにわざわざアメリカに来たわけ？

愛子 はい。どうぞ。

恵と信代とヘンリー。

愛子 さあ、どうぞどうぞ。あのね、恵の母親です。そして……。

信代 おや、ママさん。アイム、グラッド、シー、ユーじゃ。

光子 (困ったが) 妹がお世話になっているようで。

ヘンリー ヘンリーと言います。よろしく。

光子 よろしく。メグ、スーツケースは？

恵 ママ。あたし、ワシントンに帰りたくない。

光子 なに言ってるの。あなたは私と日本に帰るの。

愛子 あのね、メグはこちらのヘンリーとお付き合いしてるの。

光子 ふーん。(ヘンリーをジロジロ見る)

信代 ええ娘さんで、うちのヘンリーにぴったりじゃあ。

光子 待ってくださいよ。藪から棒に……。犬の子じゃあるまいし。そちらさまのバックグラウンドも存じあげないのに……。

愛子 こちらにはいついらしたんですの？

信代 ナインティーン・セブンティーンじゃ。ハツハツ。写真結婚でなあ。

愛子 写真結婚！

信代 神戸からシップに乗った時や心細かったなあ。じゃけえど備中の高粱からまだ三里離れた村じゃあ、米の飯なんか正月しか食わしてもらえりゃせん。

光子 あなたね、Ineligible alien って言葉、ご存じ？

信代 知りませんがなあ。

光子 帰化不能の外国人。Ineligible alien。つまり決して西洋の文化をわが物にできない人種。あのね、

西欧の人たちには、男女の愛が結婚の前提なんです。だから、奴隷売買のような写真結婚を平気でできる民族は、アメリカ人になれないの。だから Ineligible alien なの。

信代 じゃあなあ。ユーハブ、フィッシュ・ハート。アイ、ハブ、ウォーター・ハートじゃいっの知っとなか？

愛子 フィッシュ・ハート？

信代 魚心あれば水心あり。日本じゃあ口減らししたいんじゃない。キャリフォルニアじゃあ、嫁欲しいんじゃない。フィッシュ・ハート、ウォーター・ハート。ユーシー？

光子 何言ってるんですか。出稼ぎ労働者の写真結婚で、日本の領事館がどんな苦労したかご存じ？

恵 私、一人でこちらに残ります。私、ヘンリーさんと結婚します。

光子 そんなこと許しませんよ。パパだって許しません。

恵 ママは、この国では、結婚は、男女の愛情に基づくものだって……。それとも親同士が決める日本のやり方がいいの。

愛子 姉さん。メグは二十一よ。この国では男女の合意で結婚できるのよ。

光子 そんなことは知っていますよ。でもこの子は日本人なんだから。

信代 そう。私もそれを言いおんじや。同じ日本人。セイムセイムじや。

光子 同じ日本人なんて言われたくありませんね。

信代 あんた、ジャパニーズじゃねえんか？

光子 日本人にもね、いろいろいます。

愛子 そりや移民の方が、外交官より貧しいのは事実よ。でも、イタリア人もアイルランド人もユダヤ人もみんな文無しでこの新大陸にやって来てアメリカ人になったのよ。日本人がアメリカ人になってどうしていけないの。

光子 ヨーロッパから移って来た人たちは、それぞれの国で、政治的、宗教的な抑圧から逃れてやって来たの。ところが、日本人はお金稼ぎのためだけにやって来たのよ。合衆国の建国の理想も、愛情もありはしないの。十年働いてお金をためて日本に帰る、それだけでしょ。

信代 いいや、うちんとこじゃ日本に帰らんで、ヘンリーだってこっちのスクールに入れとるんじゃよ。
光子 何年たってもお金がたまらなくて、日本に帰れないどうしようもない人もいるようね。

信代 クー。(悔しい)

光子 ヘンリーさん。あなた何やってらっしゃるの？

ヘンリー わしは、レストランでコックやっとなる。

恵 とってもお料理上手なの。

光子 じゃ、メグを食べさせて行ける？ あんた、日本に帰って日本料理の料亭で板前としてやって行ける？

恵 (ヘンリーを見る)

光子 どうなの？

ヘンリー ……わたしらは正式に勉強しとらんけん。

沈黙。

光子 あんたたちのせいだね、この国の人は日本人を、単純労働しかできない人種だって思い込んじゃった。だからジャップって馬鹿にするのよ。

恵 でも幸次郎叔父様は移民なのに、立派な芸術家としてアメリカで認められてるわ。

光子 洗濯機も冷蔵庫もない偉大な芸術家ね。

恵 そんなものなかったって。お金だけが人生じゃない。

光子 そんなに貧乏が美しく見えるんなら勝手にしなさい。あなたの首に縄をかけて連れて帰るわけにはい
かないもの。(コートを着た)

恵 ママ……。

光子 私は今夜はマンハッタン・プラザにいます。一晚、考えなさい。

玄関に出て振り返った。

愛子 後で、電話する。

光子 愛子。

愛子 うん？

光子 もしも、もしもよ。日本とアメリカが戦争になったら、どうなると思う？

恵 戦争？

愛子 日本とアメリカが？

光子 絶対ならないうって言える？

愛子 だって……。 (笑い出す) そんな。たとえば、日本軍がサンフランシスコに上陸して、ロッキー山脈
を越えてこのニューヨークまで進軍して来るの？

光子 支那がね。支那が問題なの。

光子、出て行く。

愛子 メグ。偉かったよ。

信代 ああ、惚れ惚れするほど立派じゃったでえ。

恵 ……。

愛子 ヘンリー、どうするの。

ヘンリー トウモロロ、サクラメントに発^たとう思つとる。

愛子 西海岸に行くの。

恵 私、いったんママや叔母様と離れて暮らすことが大事だと思うの。

信代 そうじゃ。向こうじゃ、ハウスもあるじゃけえ……。

愛子 そう。まずは、あなたたちだけで始めてみるのね。

ヘンリー はい。

愛子 なんにもしてあげられないけど、ハネムーンのお金、私が出してあげる。(と、クローゼットの所に
行く)

信代 恵さん。ウェスト・コーストなら、日系人がぎょうさんおるけ、ジョブようけあるけな。

恵 いいえ、向こうで私、美術学校に通うんです。

信代 美術学校。ヘンリー、大丈夫なん？

ヘンリー 頑張るが。

愛子 メグ？

恵 なあに？

愛子 あんた、ここに入れといたお金、どっかに移した？

恵 いいえ。

愛子 昨日、稼いだモデル代、ここに入れといたはずなのよ。十ドル。それが八ドルしかないの。

信代 そりゃあ、泥棒じゃ。

ヘンリー 泥棒なら、ハドルだけ残したりせんじやろ。

愛子 ……そうよね。

そこへ、ブザー。

ヘンリー メグさん、荷物の用意してください。

恵 スーツケース一つだから。

信代 わしらも手伝うてやるけ。

恵 大丈夫です。

信代 遠慮せんでもええが、うちの嫁じゃねえん。

二人、ベランダの方へ出て行く。

鶴橋、入って来る。

愛子 あら、鶴橋さん。今ね、ちよつとごたごたしてる所なの。

鶴橋 ご主人は、どうなさっています？

愛子 とっても元気よ。

鶴橋 それはよかった。これ。(と、包みを出す)

愛子 なあに？

鶴橋 今度赴任して来た奴が日本酒を持って来たんで。

愛子 ありがとう。

鶴橋 ……稲垣さん、落ち込んでいるんじゃないかと心配してたんです。

愛子 あの壁画の仕事が追い込みで、毎朝、元気に出掛けているわ。

鶴橋 ええ？ 今日、ハーレム裁判所に出掛けたんですか？

愛子 そうよ。

鶴橋 ……。

愛子 どうしたの鶴橋さん？

鶴橋 だって、あのプロジェクト、先月で中止になったんじゃないかなあ。

愛子 中止？ そんなことないわよ。今度は『奴隷解放』だって張り切ってたもの。

鶴橋 うん、『奴隷解放』ってテーマも、中止の理由のひとつかもしれない。

愛子 なに言ってるの。

鶴橋 ハーレム地区の区会が中止の決定をして、たしか、今週から壁から画を剥がしてるはずですよ。

愛子 だって……。そんなら幸さんは毎日、どこへ行ってるの？

鶴橋 さあ。

そこへ、ブザーの音。

愛子 幸さん……。

入って来たのは石炭の袋を担いだ陳さん。

陳 ワタシ、セキタン、ホルノ、トクイダヨ。アトハンブン、シタニアルヨ。

愛子 ありがとう。

陳 ゼンブデ、ワンダラーニ、シトクヨ。

愛子 後で払うわ。

陳 シャワーノグアイ、ミヨウカネ。(と、バスルームへ)

その時、ベランダで「どうしたの叔父様！」という声。

愛子 幸さん？

スーツケースを持った恵に支えられて幸次郎、入って来る。

恵 あんな吹き曝しの所にいたら風邪を引いちゃうわ。

愛子 どこに行ったの？

幸次郎 ……。そりゃあハーレムだよ。

愛子 壁画が剥がされるのを見てたの？

幸次郎 ……。

愛子 ちょっとここに寝なさい。冷えきってるわ。(とソファに幸次郎を寝かす) メグ、コーヒーを入れて。

恵 はい。

幸次郎 ひでえもんだ。この一年、魂を込めて描いた奴をバリバリ、ガンガン。

愛子 どうして、中止なの？

幸次郎 僕の描いた『アメリカの独立』のワシントンやリンカーンの顔が黒すぎるって……。

愛子 ええ！ だって、あの色調はあなたのスタイルじゃない？

幸次郎 ハーレム地区は、白人中産階級の町だ。彼らは僕が、リンカーンを黒人に描いたって……。

鶴橋 デプレッション以来、ハーレムに黒人たちがどっと流れ込んでいるからね。これまで住んでいた住民はヒステリックになっているんだ。

愛子 人物の顔が黒いのは芸術家の表現の問題でしょう。

幸次郎 いや、奴らの本音は違う。アメリカ国民が飢えている時に、市民権さえない外国人の絵描きに税金を使うのは理屈に合わないって。……そういうことらしい。

愛子 いつ、決まったの？

幸次郎 先月の二十五日だ。

愛子 どうして私に言わなかったの。

幸次郎 ……。

愛子 なんて言ってくれなかったの？

そこへ「ああこれでええ」と信代、戻って来る。

ヘンリー お母ちゃん。幸次郎小父さん。

信代 あんたが絵描きの先生か。

恵 (コーヒーを持って来て) 叔父様、どうぞ。

幸次郎 ありがとう。

鶴橋 いやいや、それなら僕の持って来た灘の酒がいい。

幸次郎 ええ、灘の酒があるのかい。

愛子 毎日、出掛けて何をしたの？

幸次郎 セントラル・パークやね、ハドソン川の川岸を……。

愛子 ……。

幸次郎 時間がなかなか過ぎないんだよ……。

愛子 こんな真冬に……。カフェなんかに入ればいいのに。

幸次郎 今日はあんまり寒いんで……。それで角のジーノの店でエスプレッソを飲みたいと思ってね。お前

の金を失敬した。

鶴橋 まあ、一杯。

幸次郎 ありがとう。(飲む)

鶴橋 どうです？

幸次郎 五臓六腑に染み渡る。……愛子。

愛子 うん？

幸次郎 これな(と、絵葉書のような紙) 約束のブーツ。

愛子 ……。ありがとう。あったかそう。

幸次郎 内側は、毛皮にしといた。

突然、恵が立ち上がって、スーツケースを持った。

愛子 メグ！ どこに行くの？

恵 ママのホテルに行って相談します。

愛子 ママと相談なんかしたら、日本に帰ることになっちまうよ。

恵 でも、もしアメリカと戦争になったら……。

ヘンリー そげんなこと起こりっこねえが。

恵 ごめんなさい。

信代 どうなっとなるんじゃ。

恵、出て行った。

陳さんはかなり前から出てみんなを見ていた。

愛子 ヘンリー、追い掛けなさい！

ヘンリー ……。

愛子 なにしてんの。あの子、日本に帰っちゃうよ。

ヘンリー ……。

幸次郎 どうしたんだ。

愛子 メグ、ヘンリーと駆け落ちすることになったの。

幸次郎 ほう。駆け落ちね。それでお前、逃げられたか？

沈黙。

陳 シャワー、ナオツタヨ。

愛子 ありがとう。

信代 ヘンリー。お前、めえ国籍はアメリカじゃ言うて、中身はジャップじゃなあ。ヤンキーなら、女の尻っぺた、ペンペンて自分のものするんけどなあ。

愛子 だらしがないねえ。あんた幸さんなんか、あたし口説く時なんかすごかったのよ。あたしが嫌だって言

ってるのに、無理やり足を押さえ付けて。ねえ、幸さん。

ヘンリー ……。

幸次郎 ワシントン・スクエアでね。サンドイッチの耳を野良犬にやったら懐かれて弱ったよ。毎日、僕を待ってるんだ。

愛子 あたしね。支那の会で講演するの。黒人を相手にね。

鶴橋 黒人に？

愛子 そうなの。黒人たちがね、日本の大陸進出を喜んでいるんですって。

鶴橋 なんて黒人が日本の侵略を喜ぶんです。

愛子 日本人もカラーだ。カラーがアジアから白人を追い出そうとしている。日本人ががんばって。そんな黒人たちにね、日本の戦争に反対するよう呼び掛けて欲しいって。

鶴橋 なるほど。それで日本人のあなたに話させようってわけだ。

幸次郎 ヘンリー。こら、元気を出せ。

ヘンリー 大丈夫じゃ。わしら日系人は、生まれた時から、ずっとひでえ目に会っ取るけえ。

幸次郎 ……。

ヘンリー エニウェイ。メグのママが言うた通りじゃ。わしらはアメリカ建国の理想に燃えてこん国に来たのどちがう。どうか、毎日の飯を食うのが精一杯じゃ。

幸次郎 そう落ち込むな。……たしかに僕も君の親父さんもこの国の建国の理想に共鳴してやって来たわけじゃない。言う通り、この国の豊かさにあこがれてやって来た。……でもな、アメリカの豊かさってなんだ。広い国土に育まれた豊かな農産物、そして莫大な天然資源だろう。キャリフォルニアのイチゴ畑で、

自ら腰をかがめて働いたのは誰だ。山奥の鉱山の現場で汗を流したのは誰だ。陳さんなんだ。お前の親父さんなんだ。

鶴橋　ねえ、陳さん。どうしてアジア人はいじめられるんだろう。この広い国土を横切る横断鉄道の枕木一本一本の下には支那人が一人ずつ眠っているって言うじゃないか。

陳　ニホンジン、チュウゴクジン、自由ノ女神ノウラガワカラ、コノ国ニキタヨ。
愛子　裏口入国か太平洋は。

陳　ソウ。裏口、ダメネ。日本ダツテソウダヨ。横浜、神戸、正面玄関。デモ、チュウゴクジン、チョウセンジン、博多カラ、日本ハイッタ。裏口カラハイッタカラ、イジメラレタヨ。

ヘンリー、顔を上げた。

陳　ソレデモ、チンサン、ニホンヨリ、コノクニ、イイネ。

3

イーゼルには『失樂園』の絵。

隅の机で、老眼鏡をかけた幸次郎が作業をしている。側で見ている信代。

信代 ほんまもんのゴールドなん！

幸次郎 買った人のイニシャルをこう切り抜いてね。ほら、象牙の櫛やらお化粧セットにくっ付けるんだ。
信代 はー。チファニーは金で名前をいれるんじゃ。

幸次郎 クリスマス前だからね。ティファニーは大儲け、こっちは大忙し。

信代 こげん贅沢なもん、プレゼントに貰う女子は幸せじゃなあ。

幸次郎 注文の名前、見てるとおもしろいよ。これはシュルツさん。ドイツ系だろうな。（名簿を示して）

北欧系あり、イタリア系あり。……この人たちのお祖父さんか、ひい祖父さんは、わずかな家財道具背負ってこの希望の国に転がり込んで来た。そんで、いろんな商売を始めた。血の滲むような苦勞して……。

その何代目か後の子孫が、こんな高価なプレゼントをカミサンに贈れるお金持ちになった。

信代 アメリカン・ドリームじゃね。

幸次郎 このニューヨークの港にスコットランドで食い詰めた両親とともに、十三歳の少年が上陸した。その少年は一代でアメリカの鉄鋼王になりカーネギー・ホールを作った。ヨーロッパじゃ、考えられないことだよ。

信代 ふーん。先生のその器用な所を見込んでのお願いねげがあるんじゃけどな。

幸次郎 はいはい。なんでしよう。

信代 （布切れを出して）これに、アイ、アム、チャイニーズって書けるかの。

幸次郎 アイ、アム、チャイニーズ？また、どうして？

信代 こねえだ、来い言われて三十二丁目の郵便局に行っ来てたんじゃ。

幸次郎 僕らも呼びだし受けて指紋取られた。（布に書き始める）

信代 五本の指にベタツッて墨つけられたで。

幸次郎 なんかに卑屈な気分になるね、あれは。自分が犯罪でも犯したような。

信代 なんかに悪い事する奴じゃと思われとるような……。

幸次郎 仕方ないさ。僕らはヒットラーと軍事同盟を結んだ国の国民だからな。

信代 こねえだバスの中で、「アーユー、チャイニーズ」って席を譲ってくれるアメリカ人の小父さんがおつてなあ。それで、十二丁目まで、ジャップはひどい奴だとかチャイニーズはかわいそうじゃとか言うおつた。

幸次郎 うん。日本は南京でひどいことをやったからね。

信代 (ズタ袋からチャイナ・ドレスを出す) これ、チャイナ・タウンで四ドル。ね、この胸のところに「アイ、アム、チャイニーズ」を縫い付けてよ。

幸次郎 なるほど。

信代 私、今日からジャップ、やめ。チャイニーズで生きてくんじゃ。

幸次郎 ストーブで乾かすといい。

信代 うめえもんじゃ。

そこへ、和服の愛子が寢室から出て来る。

愛子 この藤色の裾模様の、気に入った。

幸次郎 おやおや、大したお召し物だね。ボストンの講演会に着て行くのか？

愛子 日本に帰る支局長夫人が、置いていってくださるって鶴さんがね。ねえ、そんなアルバイトやめて、
絵描いたら。

幸次郎 そうもいかんよ。

愛子 私、大きな仕事来たのよ。

幸次郎 ふーん。また、講演会か。

愛子 うん。今度はロサンジェルスだって。

幸次郎 へえ、行っというで。

愛子 六カ月かけて在留邦人のいる街をくまなく回るんですって。

信代 この丸帯、ぼっけえええなあ。

愛子 ちよつと派手すぎないかしら？

信代 人さまの前に立ってからお喋りするんじやろう。派手ぐれえがちようどええんじや。(酒瓶を持つて) ええ、只今より、稲垣愛子先生のお話があります。(酒瓶を渡して) 稲垣先生、どうぞ。

愛子 レディース・アンド・ジェントルマン。アイム、アイコ・イナガキ。……ねえ、ロサンジェルス、

一緒に行こう。

信代 そうだよ。二人で行ってくれば！

幸次郎 僕が行ったってすることがないもの。髪結いの亭主みたいになっちまうよ。

信代 今だって髪結いの亭主じやろうが。

幸次郎 ……。(仕事に戻る)

信代 ちよつと、部屋あ、借りるよ。(寢室へ行く)

愛子 (幸次郎の背後に行つて) あんまり、根つめると体に悪いわ。

幸次郎 ……西部の在留邦人は、保守的だぞ。

愛子 だから行くのよ。日本人の私がアメリカ人相手に平和を説いても仕方ないでしょ。在米の日本人の八割が西部にいるのよ。だから……。

幸次郎 ……メグから手紙来たつて。

愛子 うん。スカートをはいっていると贅沢は敵だって白い目で見られるんで、ママにモンペを作ってもらいましたつて。(手紙を取りに行く)

幸次郎 贅沢は敵ですか。

愛子 日本中のダンスホールが十月一杯で閉鎖されたつて。

幸次郎 ジャズもダンスも悪しきアメリカ文化だもんな。

愛子 (手紙を渡して) それから、煙草のチェリーは「桜」になったつて。

幸次郎 そんなこと書いてきて、大丈夫なのかい？ なんだいこの「パパは、アナザールームに行つてコード・ライスを食べています」つていうの？ 冷たい米？

愛子 英米派は、外務省で冷飯を食わされてるつてことでしょ。

幸次郎 なるほど。

そこへ、信代、チャイナ・ドレスに着替えて出る。

愛子 わあ、本物の支那人。

幸次郎 シーサンヤオチュー、ルーチョンキ。

信代 コーデル、リヤンガー、タンメン、イーガー。シェーシェー。

愛子 ねえ、夜は簡単にパンとソーセージでいいかしら。

幸次郎 コールド・ライスでいいから日曜日ぐらい、米が食いたいなあ。

信代 あんたも大変じゃねえ。稼ぎのねえのになんやかんや言う亭主持ってからに。

愛子 (小声で) こないだみたいに怒らせないでよ。今日はせっかく機嫌いいんだから。

信代 大丈夫じゃ言うて。

愛子、寢室へ去る。

信代 あんたの奥さん、偉いねえ。

幸次郎 偉いなあ。

信代 あの人には根性があるけんなあ。自分が正しいと思うたら、まわりがどう言おうとやってじゃ。

幸次郎 そう。いつもこの世界がどうなれば皆が幸せになれるか考えてる。僕なんか、自分が食ってくだいで精一杯だ。でもね、偉すぎる。

信代 偉すぎるってこたあないでしょうが。

幸次郎 ああいう頑張り屋さんにはたにいと辛いもんだ。毎日、お前は怠けてるんじゃないかって言われてるような気がしてさ。

信代 じゃけん、先生もいい絵描かなきゃあ。

幸次郎 そうなんだが……。

信代 (絵を見て) これ今、描いとるんか？

幸次郎 先月やっとなんか完成。

信代 これでええんか？

幸次郎 そうですよ。

信代 これ、逆さまじゃねえんか？

幸次郎 ハハハハ。『失樂園』という題でね、二人で落っこちてるの。せっかく神様がくださったこの地球で人間は悪いことばかりしてきただろ。

信代 なあ、なんで先生は綺麗な絵を描かんの？

幸次郎 ……綺麗な絵ねえ。僕たちの住む世界は、美しいばかりじゃないからさ。だからこの世界をありのままにね。

信代 ありのままっっちゃうけど、先生、絵、下手じゃなあ。

幸次郎 (ムツとするが) ……下手だねーえ。

信代 この手のところなんか、まるで小学生が描いたようじゃ。もっとそっくりに綺麗に描けんのかなあ？
わしゃ楽しい絵や綺麗な絵がええ。誰だって、辛^{つれ}えことや醜いことを見てえたあ思わんで。

幸次郎 そう思う人の方が多いね。

信代 じゃけん、先生の絵は売れんけえ、奥さんを働かしとんじゃ。わしだってこげな絵、ダイニングに飾りとうねえもんなあ。

幸次郎 お前なんか絵のことがわかるか！

信代 わからんで、こげん汚い絵！

幸次郎 なんだと！（と、信代に掴みかかる）

愛子 （着替えて出て来て）ちよっと、なにしてんの！

信代 （モップを持って）ふん、才能がねえけ、一つ、五十セントなんて内職しとるくせに。

幸次郎 うるさい、このアマ！

愛子 やめなさい。

信代 絵が下手くそだってほんまのこと言うてどこが悪りいなん。

そこへ、電話。

港の汽笛。

愛子 ハロー。ああ、鶴さん。どう、元気？ 着物、着てみた。ありがとう……ええ！ 嘘だあ！ どうして？ それで……何時？ ……一時？ 東部時間の？ ……わかった。うん、気をつける。うん、そうする。じゃ、なんかあったらまた知らせて。ありがとう。（電話を切る）

信代 どうしたかね。

愛子 幸さん、大変。戦争よ。

信代 どこが戦争なん。

愛子 日本軍が、パール・ハーバーを攻撃したんですって。

幸次郎 いつだ？

愛子 ハワイ時間の朝六時ですって。

幸次郎 ということは、五時間前だ。

愛子 ラジオ！

幸次郎はラジオのイヤホンを耳に付けてダイヤルを回す。

信代 日本は勝ったん、負けたん？

愛子 そんなことまだわからんよ。

信代 だって、鶴さんて、新聞社じゃろうが。

愛子 詳しいことは電話では言えないからって。

信代 ハハン。テレホン、スパイされとんじゃ。

愛子 (幸次郎に) なんて言ってる？

幸次郎 ワシントンでは緊急会議を開いているって。

そこへ、ヘンリーが飛び込んで来る。

ヘンリー ああ、お母ちゃん、ここにいたん？ よかった。

信代 あたしやあ大丈夫じゃ。

ヘンリー 街中、大騒ぎだよ。よく、平気じゃったなあ。

信代　なんかわいわい騒さわえどると思ったんじゃけど。

ヘンリー　ラジオはなんて言ってます？

幸次郎　ニューヨーク市長は、日本人は危険だから外出しないようになって。

ヘンリー　（新聞を出して）新聞、読みました？

愛子　今日はまだ表に出てないから。

信代　なんて書いとるんで。

ヘンリー　（新聞を拾い読みする）真珠湾に飛んだ日本のネービーの飛行機、三百五十。

信代　三百五十、すげえなあ。

ヘンリー　湾の中にいたアリゾナ、オクラホマ、キャリフォルニア、ウエスト・バージニアなど戦艦六隻は爆撃で沈没した。

信代　戦艦、六隻！ やった、やった。帝国海軍はやっぱり強えなあ。

ヘンリー　お母ちゃん。

信代　ふん、白豚野郎。ジャップ、ジャップとばかりしてからに！　ざまあ見い。わしだってアメリカは金持ちの国じゃって聞いてやって来てらひでえ目に会ったで。藁わらの中で寝たで。じゃけえわしら、義捐金を送ったよ。道に落ちとる煙草の銀紙を溜めてこんな玉にして日本に送ったで。これで飛行機作って、頑張がんぢっておくれ言うてな。

ヘンリー　いくら煙草の銀紙送っても、飛行機なんか作れんがな。お母ちゃん。

信代　何言うтонじゃ。お前めだって学校でジャップ、ジャップ言われて泣ないて帰かえって来たじゃねえか。ハイスハイスクールで、白人と一緒にプールに入れてもらえんで川で泳おえいどったじゃにえいか。痩せ我慢みやあしとるお前

が不憫でな。(叫ぶ) 堪忍袋の緒が切れたっちゅうんよ!

ヘンリー お母ちゃん、何を言とるんで。日本はひでえことになるで。馬鹿じゃ、本当に馬鹿じゃ。こんなでっけえ国と……。(初めて気づいて) なんでえ、その格好は?

信代 フッフ。備えあれば憂いなしじゃ。

そこへ、鞆を持った鶴橋、やって来る。

愛子 ああ、どうなの?

鶴橋 わからん。わかっているのは、僕らが敵の真っ只中に取り残されたということだ。カーテンを閉めた方がいい。

愛子 そうか。(カーテンを閉める)

幸次郎 新聞社は?

鶴橋 今日中にFBIが来るでしょう。(鞆を開いて) ちよっと、これ処分させて貰います。

信代 秘密文書じゃろ。

鶴橋 ともかく、反米的な文書があると不利になりますから。日本大使館も、書類を焼く作業で大変でしょう。支局はスチームなんで燃やせないんです。(と、書類をストーブにくべる)

愛子 手紙なんかも注意した方がいいわね?

鶴橋 それにこしたことはありません。

幸次郎 僕が持って来よう。(と、出て行く)

ヘンリー 母ちゃんは、住所登録がしてあるカリフォルニアに帰らにやいけん。

信代 嫌じゃ。わしはイースト・コーストの方がええんじゃ。

鶴橋 いや、そりゃあ帰った方がいい。ここにいとエリス島に送られますよ。不法滞在者の監獄に。

信代 監獄？ 監獄はいやじゃ。

鶴橋 ワシントンでは、灯火管制が敷かれて、真っ暗のようです。

信代 日本軍は、ニューヨークも爆撃するじゃろか。

愛子 (カーテンから覗いて) 港も真っ暗。

信代 自由の女神、ぶっ壊したら愉快じゃろうな。

ヘンリー ちょっと、その前にわたしたちは殺されるで。

鶴橋 僕たちもそのうち、移民局の調べがあるでしょう。野村、来栖両大使も警察に連行されたようです。

僕たちプレスも、どうなるかわかりません。

幸次郎が手紙の入った菓子箱を持って来て、ストロブにくべる。

愛子 私たちもみんな監獄に入るの？

鶴橋 それはわかりません。

ヘンリー 日本レストランも日本人の経営する商店もみんな閉鎖されたで。ああこれ、桑山商店の親爺に分

けてもらうたんです。(と、出す)

愛子 わあ。干しワカメ。

ヘンリー 味噌と醤油です。

愛子 嬉しい！ あなた。

幸次郎 桑山商店も閉じるのかね。ああ、梅干しを買いだめしておけばよかった。

信代 そう。日本はなあ、今度の戦、百年戦うんじゃ。

ヘンリー ちよっとお、お母ちゃん。

愛子 ああ、佐山さんからの絵葉書。これも燃やしちゃうの？

幸次郎 ソ連からの手紙はやっぱりまずいだらう。

ヘンリー 綺麗じゃなあ。

愛子 レニングラードのエルミタージュ美術館の絵葉書。(読む)「私たちはマルクス通りの新しいアパ-

トの四階を与えられ、毎日、憧れのメイエルホリド劇場に通っています。この国には、食えない演劇人や

絵の具の買えない絵描きはいません。芸術家にとってこの国は……」

幸次郎 もう、いい！

愛子 仕方ないね。

ヘンリー あ、燃やすなら、それわしにくだせえ。

幸次郎 そんなもの持つてると危ないよ。

ヘンリー わしはアメリカ人じゃけえ、身体検査までされんじやろう。

愛子 あなたも佐山さんと会ってるんだしね。(渡す)

ヘンリー ありがとう。大切にしますけん。さあ、お母ちゃん。行くよ。

鶴橋 ああ、僕も行こう。なんか情報が入り次第、お伝えします。

幸次郎 頼むよ。

信代 ……（幸次郎に）これありがとうよ。

愛子 手紙、書くわ。気を落とさないでね。

信代 ウェスト・コーストはええよ。ビーチに出りゃあ、ああ、この海の向こうにゃ日本があるんじゃないと思えるからなあ。そけ行くとこっちの海は他人の海じゃ。

愛子 残念ね、せっかくお友だちになったのに。

信代 大丈夫じゃ。
てえじようぶ

二人、出て行く。

愛子 こんな時、町に出て、大丈夫かしら。

幸次郎 馬子にも衣装。ジャップにもチャイナドレスだ。

愛子 （元気よく）ご飯にしようか！

幸次郎が、立ち上がって、スケッチ・ブックを出して来る。

幸次郎、恵のスケッチをキャンパスに張る。

愛子 ああ、メグ、自由の女神、描いたんだ。

幸次郎 下手くそだなあ、まったく。

愛子 もう日本には手紙も書けないか。

幸次郎 無理だね。

愛子 日本じゃ、今、みんな何を思ってるのかな。

幸次郎 さあ……万歳、万歳だろう、おそらく。

愛子、スケッチ・ブックの白紙を一枚持って立つ。

愛子 稲垣幸次郎。

幸次郎 なんだい。

愛子 稲垣幸次郎。

幸次郎 (立つ) はい。

愛子 右の者を、世界民主主義連邦共和国の市民第一号となす。一九四一年十二月七日。

幸次郎 (受けとって) ありがとうございます。

愛子 佐山さん言ってた。戦争反対を唱えていた人たちが牢屋の中で転向したのは、拷問のせいだけじゃないって。監獄に入れられて、自分が日本の民衆から孤立して一人ぼっちだって感じたからだって。

幸次郎、レシーバーを耳に付ける。

幸次郎 ……。

愛子 でも、私たちは、一人じゃないものね。

幸次郎 静かにしてくれ。トーキョーが入った。

愛子 チェツ、チェツ。

愛子、酒瓶を持った。

愛子 地球の裏側じゃあもう、九日の朝。今朝のお味噌汁の具はなにしようかな。お早う。今日もお寒い
ですね。あんたのどこ、鏡もち、頼んだ？ 私んところは、毎年、田舎から送って来ますんですよ。今年は
ぶりが高いんですってね。

幸次郎 ……。(ラジオに熱中している)

愛子 こちら、マンハッタン・アイランドです。聞こえますか。日本アイランドから一万五千キロ離れた異
国の町の私たちのことを忘れないでください。……凍てつくような寂しさです。聞こえますか。日本の皆
様、聞こえますか。

二幕

4

イーゼルには『娘』の絵。壁には星条旗。
ソファアールでラジオを聞いている幸次郎。
ブザーが鳴る。ビクツとする。

幸次郎 (ドアの所へ行き) フー、イズ、イット?

愛子の声 5711。

幸次郎、ドアの鍵を開ける。

荷物と書類を持って入って来る愛子。

愛子 5712、元気にやっと思ったか?

幸次郎 5712、身長五フィート五インチ。体重一五五ポンド。髪色、ブラック。滞米、三十一年十一月。気分爽快であります。5711、勤務ご苦労。

愛子、台所に行く。

愛子の声 何よ。昼ご飯、ちゃんと用意しといたのに、食べてないじゃない。

幸次郎 ミルクは飲みましたよ。

愛子の声 お米が食べたいのはわかるわよ。でも仕方ないじゃない。

幸次郎 57ー、銀シャリ食うために、日本に帰りますか。

愛子 (出て来て) 駄目駄目。もう日本には、じゃが芋と薩摩芋しかないわよ。

幸次郎 まさか。

愛子 嘘じゃないわよ。(四つ切りの写真を出して) ほら『婦人倶楽部』のね、戦時家庭料理十三種。薩摩

団子、じゃがいも饅頭、芋の粉団子。原料はみんなお芋。

幸次郎 鶴橋さんに頼む恵へのお土産、何にしたんだ？

愛子 絵の具を買ったわ。日本じゃあ、もう手に入らないじゃない。

幸次郎 絵の具ねえ……。さあ、絵を描く余裕があるのかね。

愛子 うん。(読む)「今や戦局は重大なる秋、全国十数万の若き女性達は、学業をすて生産陣営に挺身せ

よ」メグはどっかの軍需工場に動員されてる。(出して)だから、チョコレート。

幸次郎 おいおい、二十五にもなる娘にチョコレートはないだろう。

愛子 二十五かあ。ねえ、結婚の話が出るかもしれないね。

幸次郎 お前、情報局でどんな放送してるんだ。

愛子 南太平洋の日本兵に向かって、こんな戦いは無意味だって呼びかけるの。

幸次郎 日本から見たら、お前のやってることは国賊だぞ。君の家族がどんな目で見られる？

愛子 大丈夫よ。名前、変えてるから。

幸次郎 「マンハッタン・ローズ」か？

愛子 マンハッタン？

幸次郎 日本からのGI向けの宣伝放送で人気があるのが東京ローズだ。「あんたが戦場に行ってる間に、

車のバック・シートであんたの恋人の太腿は……」なんて。

愛子 私たちは、そんな下品な放送はしないわ。

幸次郎 下品はともかく、あんな放送して効果があるのかね。

そこへ、電話が鳴る。二人、ビクツとする。

幸次郎 ちょっと出てくれ。

愛子 手が離せないのよ。

電話が鳴りやむ。

幸次郎 なんだい、それは？

愛子 日本の新聞や雑誌のコピー。どうやったら日本の兵隊がこの戦争に疑問を持つか、これ読んで勉強するの。

幸次郎 どうやって手にいれるんだい？

愛子 上海で入手したものを重慶でマイクロフィルムにして送って来るのよ。(写真を見せて) ほら、こっ

ちは『主婦之友』の二月号。

幸次郎 「アメリカ人をぶち殺せ」か。……おい、日本の兵隊はどうして戦場に行くんだと思う？

愛子 そりゃあ、今の日本じゃ、徴兵忌避なんてできないからよ。

幸次郎 それだけかな。……僕たち一人一人の中に、みみっちい私利私欲を捨てて、大勢の人間と繋がりを
持ちたい、そしてもっと大きなもの……国の大義というんだろう、そんなものに命をかけてみたい。き
つと、そんな気持ち……。……

愛子 じゃあ、あなたは日本とドイツが、このまま世界に勝ってもいいと思っっているの？

幸次郎 ……母親が店で万引きするのを息子が見てしまった。そりゃあ万引きは悪い。でも君は日本が、愛
しくないかい。

愛子 祖国と母親は違います。

幸次郎 ……君はいつも正しい。

愛子 私だって日本が好きよ。でも、軍部に乗っとられた今の日本国と、私たちの愛してた日本とは違うで
しょう？

幸次郎 ……だが俺は胴から下をバツサリ切られて、サボテンに接ぎ木された万年青おもとだよ。……継ぎ目がギ
シギシ痛む。

愛子 ……。

幸次郎 鳩がね、ベランダに卵を生んだようだよ。

愛子 5712は、また一日、アパートに閉じ籠って過ごしたか。

幸次郎 町を歩く勇気が出ない。通り掛かりの人の目が、パール・ハーバーに奇襲かけた卑怯なジャップが

ここにゐるぞって言つとる。

愛子 ……。ね、あんたショート・ウェーブのラジオ聞くのよしなさい。

幸次郎 酒屋のマリウスだって、ロンドンからのドウゴールの演説聞いてるよ。

愛子 マリウスは敵国外国人じゃないでしよ。

そこへ、ブザー。ビクツとする二人。

幸次郎 おい、鶴橋さんには、お前が情報局で仕事していること言わない方がいいぞ。

愛子 なにも悪いことしてるわけじゃないわ。出てよ。

愛子は雑誌のコピーを片付ける。

幸次郎、あわてて、ラジオを片付けようとしてどこにも場所がなく、ストーブの中に突っ込む。

愛子がドアを開けると鶴橋が入って来る。

愛子 ご出発前の忙しい時にすみませんねえ。

鶴橋 ああ、これね。我が家の使い残しだけど。醤油と味噌。

幸次郎 助かるなあ。

愛子 これ絵の具なの。かさ張ってすみません。それとチョコレート。

鶴橋 チョコレートかあ。日本まで二カ月だからなあ。

幸次郎 ええ、交換船は二カ月も、かかるのか？（と、寢室に消える）

鶴橋 南下してリオデジャネイロで南米の日系人を四百人乗せて、それから大西洋を渡って希望峰を越えるんです。

愛子 ええ！ アフリカの下を回るの。

鶴橋 一方、横浜で英米人を乗せた浅間丸が東アフリカのロレンソ・マルケスまで我々を迎えに来るわけです。

幸次郎 （寢室から荷物を持って来て）つまり大西洋とインド洋と、赤道を二度横切るわけだ。

愛子 チョコレートは駄目か。

幸次郎 これも済まないが、日本にいたら小包で。住所は書いてあるから……。

鶴橋 （見て）和歌山のお母様へですか？

愛子 ああ、私も。（と、寢室へ）

幸次郎 故郷（くに）を出てから三十年。今年で七十だからね。親不孝な息子だ。中身はバザーで買った膝掛けだから。

鶴橋 お手紙は中に？

幸次郎 ……字が読めないんだ。お別れの言いようもない。

鶴橋 稲垣さん。（煙草の吸い殻をストープの中に放り込んだ）

幸次郎 （見てあわてる）なんだい？

鶴橋 日本に帰りましょうよ。最後の交換船です。

幸次郎 ……。灰皿ならここにある。（出す）

鶴橋　ともかく乗船希望を出してください。まだ間に合います。

幸次郎、咳き込んで、ストーブの中を覗く。

鶴橋　あなた方は今、敵国の中で孤立しているんですよ。

幸次郎　私たちにはこの国に親しい友人たち、隣人たちがいます。孤立なんてしません。

鶴橋　しかし、今の今も太平洋の島々で、両国の若者たちが死に物狂いで戦っているんです。明日にも、前の八百屋さんの息子さんがジャップに殺されて遺骨で帰ってくるかもしれない。それでも、あなたのステイツの友人たちは、あなたたちジャップに優しくしてくれると思いますか？

幸次郎　……。この絵、いいだろう。

鶴橋　日本に帰った恵さんですか？

幸次郎　メグというわけじゃない。(ストーブの中から吸い殻を出して吸った)

鶴橋　煙草ならありますよ。(渡す) 絵、もう売れないんでしょ？

幸次郎　ありがとう。

鶴橋　ティファニーのアルバイトは？

幸次郎　(首を振る) 僕は敵性外国人だよ。

鶴橋　じゃあ、どうやって食べて行くんです？

幸次郎　……。

鶴橋　愛子さんの講演のお仕事ももう駄目なようだし。

幸次郎 うん。

鶴橋 で、愛子さん、今どんなお仕事を？

幸次郎 愛子がどんな仕事をしようかと君が詮索することじゃない！

鶴橋 (びっくりして) はあ。……僕はつまり、あなた方がこの敵国でどうやって生きて行くか、それが心配で……。

幸次郎 ……。

愛子 これ早稲田の家へ。ねえ、あなた、さっき電話くれた？

鶴橋 いいえ。どうしたんです。

愛子 時々「ジャップ、ゲッタウト」って電話がね。

そこへ、ブザーの音。

愛子がドアを開ける。入って来たのは、ヘンリー。

愛子 ええ、ヘンリー！

ヘンリー ヘーイ。ハウアーユー。

愛子 アイム、ファイン。ああ、鶴橋さん、日本にお帰りになるんでね。メグへのお土産、届けていただくの。

ヘンリー 日本に行くんですか？

愛子 あなたも一筆、書いたら。

ヘンリー 僕のことなんか忘れてますよ。

幸次郎 うん。女は過去を振り返らないからな。

愛子 ねえ、今日、ゆっくりできるんでしょ。

ヘンリー いいえ、時間がありません。今日はお別れに来ました。

幸次郎 なんだ、なんだ？

ヘンリー わし、アーミーに志願しました。

愛子 アーミー？

ヘンリー はい。プレジデント・ローズベルトはフェブラリー、日系二世部隊を編成すると発表しました。

愛子 収容所に入れられたんじゃないの？

ヘンリー はい。ツールレイクの砂漠中です。親父とお袋の三十年は、水の泡じゃ。

鶴橋 ひでえよなあ。明治以来太平洋を渡って来た日系移民たちは、草も生えてないような荒れ野にしがみ

ついて、緑の畑を広げてどうか生活できるまでになった。ところが合衆国は、その実直で我慢強い人た

ちが開墾した畑を取り上げて、白人たちで分けちまったんだからなあ。

ヘンリー いや、キャンプの十七歳以上の日系人男子にアメリカ軍への参加と、ステイツに対する忠誠を迫

りよるけ、わしはアーミーに志願しました。

愛子 お母様、なんて？

ヘンリー 天皇さまに逆ろうたらおえん言うて大変じゃった。アメリカの資源ぎようさん使うてやるちゆう

て、キャンプの水やトイレット・ペーパーをやたら使うんじゃ。トイレット・ペーパーぐらいじゃ、アメ

リカはビクともせん言うても、日本の兵隊さんたちの味方するんじゃ言うて、キャンプで朝からジャージ

ヤー、水撒きやつとります。

幸次郎 それで、お前は、アメリカ側に付くのか？

ヘンリー イエス。アイム、ユナイテッド・ステイツの市民じゃけん。

幸次郎 なんだとお前！（と、立ち上がる）

ヘンリー ウオツツア、マター。

鶴橋 まあまあ。（ソファアに座らせる）

愛子 近頃、機嫌が悪いの。女友だちからもパツタリ電話掛かってこないし……。

鶴橋 産みの親と育ての親が喧嘩始めりゃあ、心は千々に乱れます。

愛子 その上、お米も手に入らないしでね。

ヘンリー オー、ミステイク。米を持って来よったんじゃ。

幸次郎 （ムツクリ起き上がって）どこだ、米は？

ヘンリー ああ、階段の下に置いてあります。

幸次郎 階段の下？ 駄目だ、取られたら一大事だ？（と、飛び出す）

ヘンリー ああ、重いですよ。（追い掛ける）

幸次郎の声 大丈夫って。

二人、出て行く。

愛子 米となるとあの人。

鶴橋 米かあ。米と別れられるのはソ連に行った佐山さんだけだな。

愛子 だいたい民族的伝統なんてものがあるから戦争するんでしょって言うと、稲垣はそんなこと言うんなら、佐山のいるモスコーに行っちまえて言うのよ。

鶴橋 あの人は根っからインターナショナルだからなあ。いっそ稲垣さんとソ連に行きますか？

愛子 駄目、駄目。佐山さん言った。国家に背く三条件。

鶴橋 三条件？

愛子 すべての国の言葉、すべての国の女、すべての国の食べ物を受すること。

鶴橋 まず僕は言葉で駄目だな。

愛子 佐山さんね。向こうでガリーナさんという女優さんと結婚して子供もあるそうよ。

鶴橋 自由に自分の人生を拓いて行ける人は羨ましい。

愛子 そりゃ、あの人たちってお金持ちの息子だからだって稲垣は言うの。一緒にモスコーに行った土方与志さんは伯爵だって。

鶴橋 あなたも貧乏、怖くないでしょう？

愛子 今、貧乏の真っ只中にいるわ。

鶴橋 子供の時、貧乏を経験しなかった人は、貧しささえロマンティックに思ってしまう。でも、僕のような貧乏人の息子は、貧乏が怖くっていつも寄らば大樹のもと。

愛子 あんただって、四高から帝大のエリートでしょう。

鶴橋 父親が倒産で無一文になったから、官学しか行けなかったんです。本当は音楽に進みたかったけど。

そこへ、米の袋を担いだヘンリーと幸次郎。

幸次郎 (袋から米を握って) おお、旨そうだ(と台所に袋を持って行く)

愛子 日系二世部隊は、ヨーロッパ戦線に行くんですってね。

ヘンリー いいえ、わしらはパシフィック・オーシャンで戦います。

愛子 あんた、日本との戦場に行くの。

ヘンリー はい。わしらは、愛国者としてのイメージを生みそうなことならなんでもせにやならんと思うて、必要ならばわしらは進んで戦いに参加し、祖国アメリカのために死ぬるんよ。

愛子 駄目よ！ 戦死なんかしたら。国の為なんかで死んだら駄目。

ヘンリー 大丈夫です。わしら日本語ができる二世は、ランゲージ・ユニットに配属されるんじゃ。

愛子 ランゲージ？ ああ日本語部隊？

ヘンリー 家でイングリッシュを使うと怒る愛国的ペアレンツに育てられたことを感謝せにやなりません。

(立ち上がる)

愛子 ヘンリー、あんた訓練受けたからね、岡山弁ぬけたのは。

幸次郎 君のママはキャンプに入ったままだろう。

ヘンリー ……我々のペアレンツは、我々のステイツへの忠誠を保證するホステイジじゃけん。

愛子 人質かあ。

ヘンリー グッド・ラック！

鶴橋 君と敵味方になるとは思わなかったが、武運長久を祈る。

愛子 もう行くの？

ヘンリー トウナイト、ウエスト・コーストに出発です。お元気で。

幸次郎 米、ありがとう。そこまで送ろう。

鶴橋 何度、移民局にお百度を踏んでも市民権は貰えなかった日系人の息子がなあ。

階下からピアノが聞こえて来た。

ヘンリー そうじゃ。わしらは、アメリカ人にして貰えん、じゃけん志願するんじゃ。エニウェイ、わしらがアメリカのために愛国的に戦やあ、サムデイ日系人も、アメリカ人として認められる日が来るじやろう。シーユー、アゲイン、オーバー、ジ、オーシャン！

ヘンリー、幸次郎と出て行く。

鶴橋 愛国心てのは、民族主義的心情とは関係ないのかな。イタリアンもアイリッシュもユダヤもいるアメリカで生まれればそうかもね。

愛子 鶴さん。日本のラジオは、ミッドウェイで日本海軍が勝ったって言うてる。ニューヨーク・タイムズは日本は四隻の空母と三百の飛行機を失ったと書いてる。どっちが本当だと思う？

鶴橋 ……開戦半年で帝国海軍は決定的な敗北を喫したと思います。

愛子 だったら、どうして日本に帰るの？

鶴橋 あなたはパール・ハーバーの第一報を聞いてどう思いました？

愛子 こんな豊かな国と戦争始めるなんて、大馬鹿だって。

鶴橋 そう。大馬鹿です。それにあんな奇襲攻撃をして、世界の歴史の教科書に「日本は卑怯な不意打ちをした。奴らを信頼しちゃあいけない」ってこの先百年書かれる。そう思うと……それが悔しい。

愛子 フッフ。それがあなたの愛国心か。

鶴橋 この部屋だけがほっとできる場所でした。

沈黙

鶴橋 あなたは僕の太陽だ。

愛子 (ピアノを聞いて) ああ、ユー・アー・マイ・サンシャイン。

鶴橋 そう。日本じゃあ「勝って来るぞと勇ましく」でしょ。そんな日本に帰ると思うと気が重くなりま
す。

幸次郎 (戻って来て小声で) おい、ヴィレッジに幽霊が出たぞ。

愛子 ええ、幽霊？

スーツケースを持って入って来る佐山。

愛子 あー、出たあ。

佐山 「天才は忘れた頃にやってくる」って言って欲しかったね。ドールイ・ヴェーチェル！

鶴橋 ええ！ モスコイからですか。

佐山 船に乗ったのはグラスゴーからだがね。

愛子 座って、座って。

佐山 この野郎。エリス島から何度電話しても出やがらねえ。人気絵描きになって、アツプタウンに引っ越したかと思っただぜ。

愛子 エリス島？ どうして？

佐山 そりゃあお前。敵国人で、しかもソヴィエト連邦滞在の前歴があれば、入国審査にや引っ掛かるわなあ。一カ月だぜ。

愛子 ねえ、どうしてこんな時に、アメリカなんかに来たの？ どうしたの？ 奥さんと喧嘩したの？

佐山 ガリーナ……。おい、会った早々、一番辛い話題に触れるな。ガリーナと娘は置いてきた。ソ連当局は、はじめシベリヤ経由で日本に送還すると言いやがった。そうだったら、またあの日の当たらない監獄で血膿にまみれた毛布だ。必死にお願いして、どうにかレニングラードからルアーブル行きの船に乗ったわけだ。

幸次郎 送還？ ソ連、追い出された？

佐山 俺が行った時は、すでにメイエルホリドは危なくなっていた。「正しい芸術」をやっていないってね。

幸次郎 正しい芸術？

佐山 民衆のための芸術ってこと。ところが、この民衆って奴、写実、ナチュラリズムしかわかろうとしない。本物そっくりの絵。生活そっくりの芝居を奴らは社会主義リアリズムと名づけた。リアリズムでない芸術は、民衆的でない。だから反革命だ。……そして、当の民衆はスターリンに熱狂してやがる。

愛子 あなた言ってたじゃない。この世界を歴史を動かしていくのは民衆なんだって。

佐山 その事実が変わりはないさ。しかしね、遠くから世界の民衆の幸せを祈ることは簡単だ。民衆の中に入って、その愚鈍さと、粗暴さと、利己主義を知りつくしてなお、民衆を愛し続けることはむずかしい。

愛子 でも、あの革命でロシアの農奴たちがみんな解放されたんじゃないの？

佐山 いいや、いたるところで強制労働が行われているよ。

鶴橋 ロシアの革命は、人類が思い描いたユートピアの実験だったのになあ。

佐山 そのはずだった。

愛子 その理想のために、たくさんの人が命を捧げたはずだったのに。

佐山 そうだ。でも、スターリンは「外国のスパイがいる」ってヒットラーと同じことを言い出した。スラブ民族こそ優秀なんだって言い出した。万国の労働者の祖国ソ連がね。そして俺たち外国人を排斥する。

鶴橋 今は、世界中がナショナリズムって病気にかかっている。

佐山 そう。大衆にとってわかりやすい芸術はナチュラリズム。わかりやすい思想はナショナリズム。これぞナツチョランリズム。……ソ連を出されてね。ベルリンに入った。同じだよ。ヒットラーに熱狂してる

のは、やっぱリドイツの下層階級だからね。

鶴橋 あの……（と、立ち上がる）これ確かに。

愛子 ねえ、鶴橋さん日本に帰るんだって。日本の奥様に、お手紙お願いすれば。

佐山 いや、日本の奥様は佐山の籍抜いて、新聞社の特派員と大連に行ったって。それ聞いてホツとしたよ。あいつがいつまでも日本で待ってるかとさすがに胸がキシキシして……。

愛子 あんたにも、人並みの心があるんだ。

幸次郎 鶴橋君、メグに会ったら……。

鶴橋 はい。

幸次郎 この戦争が終わるまで、どんなに卑怯なことをしてでも生きてろって。

鶴橋 わかりました。

幸次郎 送ってくよ。

鶴橋 ええ！ いいですよ。

幸次郎 そこまでさ。

愛子 元気で……。

鶴橋 うん。愛子さんも。

鶴橋と幸次郎、去って行く。

佐山 いいのかい？

愛子 あれで気をきかしたつもり。……お帰りなさい。(ウイスキーを出す)

佐山 ……ああアメリカに帰って来てほっとしたよ。

愛子 よかった。

佐山 移民局を出て、五十七丁目の画廊を覗いたんだよ。

愛子 ひどい絵ばかりだったでしょう。

佐山 同じ壁に、不気味なシュールレアリズムの作品から、甘ったるいリアリズム風の売り絵までが、悪びれもせずに並んでる。感動したよ。

愛子 どうして？ ここじゃ、芸術が商品化されているのよ。

佐山 いや、これが正しい芸術ってのが決められるよりは、こういう芸術こそ商品になるって言われる方がよっぽどいい。……少なくとも、この国じゃあ、芝居を作って死刑になったりはしない。うん、とうもろこしの酒もうまい。自分一人の命を守るだけで精一杯だったよ。

愛子 ねえ、このニューヨークで、私たちと一緒にやって行こう。ねえ、そうしよう。この戦争だっていつか終わるよ。

佐山 いや、合衆国政府はこの風来坊に、二週間のビザしかくれなかったよ。すみやかに第三国に出国せよだよ。まあ、次はお隣りのカナダかメキシコだねえ。

愛子 ……ドイツ、日本が駄目。アメリカもソ連も駄目。どうするの。

佐山 戻れば監獄、進めば地獄。

愛子 日本に帰りたいでしよう。

佐山 帰れるものなら帰りたい。

愛子 日本の女が懐かしくなった？

佐山 いや、師匠のメイエルホリドがね、やたら歌舞伎のことを聞きたがるんで弱ったよ。歌舞伎の花道からの登場と退場がすごいって。一つの世界に、一人の人物が登場することによって、それまで舞台にいた

人たちが同士の関係が乱れる。変わる。

愛子 でも私たちその他大勢は、花道から登場なんて。

佐山 でも、よく生きた人間の退場は感動的だよ。せい一杯ジタバタしてこの世界を去る。その時、観客はゆったり座っていられない。彼の退場を見るために、花道の方に体を向けなきゃあならない。日常のリアリズムじゃない。……考えてみれば、おれたちはあまりにも西洋に憧れすぎていた。

愛子 カナダへ行くの？

佐山 カナダには伝統も文化もない。なんとかメキシコに潜り込もうと思っている。レオン・トロツキも、世界中逃げて最後はメキシコだった。

愛子 スペイン語、できたっけ。

佐山 いいや。船の中でね、メキシコのレディと知り合ったんで、明日から個人レッスんだ。

愛子 美人？

佐山 若いだけ取り柄と言おうか。

愛子 この野郎。……強いなあ。

佐山 強くなかないさ。……どうだい。一緒に来るかい？

愛子 あんたがロシアに行ってるうちに、若さという取り柄もなくなっちゃった。

佐山 どの国でも、一人一人弱くて、愛しい奴ばかりだ。ところがそいつらが束になって国を作ると……

まあ信じられんことを平気でやらかす。

愛子 だから、国家から逃げ出す？ でも、この地球の上は、どっかの国家だよな。

佐山 人間、生まれた国とは夫婦の関係だが、生まれた時代とは親子の縁じゃ。

愛子 生まれた時代？

佐山 国なら亡命って手がある。まあ、駆け落ちだな。ところが、人間、別の時代に亡命するわけにはいかんからなあ。

愛子 人間はその生まれた時代を背負ってか。

そこへ、幸次郎、帰って来る。

愛子 最後の交換船も行ききましたか。

幸次郎 あの馬鹿。泣くぐらいなら帰らなきゃあいい。

佐山 どうして帰らん。

幸次郎 十五の歳にこの国に来て他の国は知らん。

愛子 この人には、日本も異国なの。おなか空いたでしょ、ご飯にしようか。

佐山 流浪の民がこの町に何を望んでいるかご存じないな。

愛子 ニューヨークに？

佐山 船の中で夢にまで見た入浴。シャワーを貸してくれ。

愛子 はいはい。

佐山 大丈夫。勝手知ったるグリニッジ村。(バスルームに向かいながら歌う) いざ、戦わん、いざ、奮い立て、いざあ……。わあ、冷てえ。

幸次郎 おい、日本に帰るんなら、まだ間に合うぞ。

沈黙。

愛子 (突然) 日本に帰^{けえ}ったら、おめえさん、一等初めになにを食うかね？

幸次郎 そうねえ。あつしは鰹の叩きだねえ。

愛子 今からですと、江戸に着くなあ八月。鰹の叩きはちいと無理ですぜ。つくつく法師が鳴き始めてや
す。となるとやっぱり鰹のカバ焼きですか。バタバタバタ。

幸次郎 (ごくん) 愛さん、わしら、何年、鰹食ってねいだらう。

愛子 真っ白なご飯に、鰹の甘いたれがたつぷり。後は茄子とキュウリの糠漬。

幸次郎 あつしや、冷ややつこに鰹節とみょうがの刻んだの。

愛子 やっぱり私は寿司だね。中トロがベロツとのった……。

幸次郎 メグは寿司なんか食ってるだらうかね。

愛子 日本は寿司どころじゃないわよ。

幸次郎 うん？

愛子 今日ねえ、情報局の幹部から日本語の会話手帳を作れって指令が出たの。

幸次郎 会話手帳。捕虜の尋問に使うのか？

愛子 捕虜の尋問に「お目にかかれて幸いです」とか「ありがとうございます」とかいう日常会話が必要だ
と思う？ 南太平洋のジャングルで「トイレはどちらでしょうか」なんて聞く必要がある？

幸次郎 どういうことだ。

愛子　すでに米軍は、日本上陸の準備を始めてるのよ。

幸次郎　日本アイルランド上陸か。

愛子　佐山さん、次はメキシコですって。

幸次郎　うん。メキシコなら汽車で行ける。

愛子　（指をつまんで）はい、口開けて。

幸次郎　なんだい。

愛子　イロハニ、コンペーター。どう。

幸次郎　（食べた真似をして）コンペーターは甘い。

浴室から、佐山の歌が聞こえている。

「ああ、インタナショナル、我らがもの」

5

イーゼルには『相撲』の絵。

街路では、なにかのパレードが行われているのだろう。

ブラスバンドのアメリカ国歌が聞こえている。

ダンボールの箱や包み紙、麻縄などに囲まれている信代が負けじと歌っている。

信代 空も港も夜は晴れて

月に数ます船のかげ

端艇はしけの通かよいにぎやかにい

ああ、うるせえなあ。いくら戦争に勝ったからって、いい加減にせいや。もう二年も経ってるんだで。

窓を閉めに行く。

玄関から大きな風呂敷包みを持った愛子。

信代 おりよー、また、ようけ買い込んだなあ。

愛子 ダウン・タウンはいいわ。この古着全部でたったの二十ドルよ。

信代 日本に米を送るんじやてなあ。

愛子 岡山おきやまに送る荷物はできたの？

信代 本家の甥わがなあ胸むね悪いんで、スレプトマイシンも入れようと思うとんじやけど。

愛子 スレプトマイシン？ そんなもの手に入るの。

信代 ヘンリーが届けてくれることになっとるんじやけど。遅おせえのう。

愛子 電話じゃあ、二時って言ったのにな。

信代 ねえ、あの子、わしを避けるんじや。わしがなんか言や、すぐ怒鳴るけん。

愛子 五年振りで、甘えてるのよ。

信子 それであんた、日本に帰るんか？

愛子 うん。日本もすっかり変わったろうし、この国にいる必要もないんだけどね。

信子 旦那が帰りとうねって？

愛子 そうは言わないけど、お父様が亡くなって、がっくり来てるのよ。私たちがみんなに反対されて一緒になった時、お父さん、三百円送ってくださった。……爪に火を灯すようにして貯めたお金だったろうに
って……。

信代 旦那、近頃、絵、描いとらんの？ お相撲さんは見飽きたよ。

愛子 ラジオで日本の流行歌ばかり聞いている。戦争終わってね、ニューヨークじゃアブストラクトがはやりだから。

信代 ふーん。虻蜂取らずがなあ。ねえ、年をとってくると、帰りとうても帰れなくなるけえな。

そこへ、制服のヘンリー。

ヘンリー グッドアフターヌーン、エブリバデー。

信代 遅いじゃねえの。

愛子 ああ、ヘンリー。お帰りなさい。

信代 ああ、この子、勲章もらったんじゃ。

愛子 すごいねえ。ああ、日本をやっつけて来た兵隊に「ご苦労さまでした」っていうのも変か。どうでした？

ヘンリー いやあ、パシフィック・オーシャンは広いのう。グアム・アイランド上陸がフォーティ・フォー

のジュライ。我々がオキナワに辿り着くのは、その九カ月後ですからね。

信代　こちらさんの実家に行って来た話、してやれ。

愛子　行ってくれたの？

ヘンリー　早稲田のあなたのファミリーにお会いして来ました。日本の新聞がね、あなた方は敵国外国人として銃殺って報道して、一度は諦めたって……。父上、あなたのフォトグラフィー見て、涙流されて……。

愛子　そう。メグとは会わなかったの？

ヘンリー　お元気でしたよ。なんか、昔みたいじゃなく、オドオドしてて……。

信代　そりゃああなたが占領軍面しとったけ。

ヘンリー　どうでした。こっちは戦争が終わって？

愛子　日本降伏のニュースにもうお祭り騒ぎ。タイムズ・スクエアじゃ、ビル窓からいっぱい紙吹雪。

街路に踊り出た人たちが誰彼かまわず抱き合ってた。……そんな中で私はボンヤリしちゃってね。戦争が終わったのは嬉しいけど。

信代　そうじゃ。戦争に勝った言うたって家賃は上がるし、ぼっけえもんじゃ。

ヘンリー　そりゃあ、世界中で戦っていた二百万の兵隊たちが帰って来たんだから、家賃ぐらい上がるだろうよ。

信代　物価だってどんどん上がって住めたもんじゃねえなあ。

ヘンリー　お母ちゃんは、今の日本を知らんから、そんな贅沢を言っとるんだ。

信代　ハウスもファクトリーもみんな焼けたんじゃて。

ヘンリー そう。東京の町には、闇とごろつきとパンパンしかない。

信代 わしらだって、ひでえ目に会ったで。

ヘンリー 母さん、もういいが。

信代 よかねえが。あんた砂漠のと真ん中にバラックぶったててなあ。鉄条網で囲って、監視塔からはサーチライトがグルグルまわって、鉄砲持った兵隊が見張ってるんじゃ。そこに三年でえ。

ヘンリー やめねえ。

信代 小せえ部屋に二家族が詰め込まれてからに。

ヘンリー なに言ってるんで。ドイツの強制収容所じゃあ、みんなガス室で殺されたんだよ。

信代 私らなんにも悪いことしとらんよ。

愛子 ユダヤ人だって悪いことなんかしとらんよ。

信代 ユダヤっちゃあ、あこぎな金貸しじゃろ。

ヘンリー これじゃけん……。母さん、キャンプで食べ物に不自由したかい？

信代 まあ、食べるだきやあな。

ヘンリー 小遣いだってくれてたんだろ。ソ連のラーゲリと比べりゃ天国だよ。

愛子 そうよ。戦争の時はどんな国だってひどいことをする。アメリカなんかいい方だわ。

信代 (怒った) あんたら寄ってたかってそがあなこと言うけえ、あんたらはどがあなんで。イースト・コ

ーストにおったから、キャンプにも入れられんで。わしらの苦勞も知らんで、なんやかんや言うてからに。

愛子 ……。

ヘンリー ……わしは、GHQの指令でね、アシオってとこの鉱山に調査に行ったんじや。山の中にね、無理やり日本に連れられて来たチャイニーズのキャンプがあつてなあ。その鉱山でトロツコを押していた三百人のうち、半分が一年で死んどった。日本が食事として与えたんは……ライス・ブライン、ほら、チキンの餌にする……。

愛子 ぬかを食べさせていたの？

ヘンリー チャイニーズをこき使って、ぬかしか食べさせなかつたんじや。ツールレークのキャンプにはホスピタルも野球場もハイスクールもあつたじやろうが。

信代 そうじや。わしらにイングリツシュ、教え込もうとしおつてな。

ヘンリー そのお陰で母さんは、イングリツシュで手紙のアドレス、書けるようになったんじやろうが。週に一回、お華を習つてたんだらう。

信代 キャンプには柳の木しかにえけんな。柳の木花瓶に挿して、お華じゃもんなあ。

ヘンリー (怒鳴る) どうして日本人は、いつでもそうなんじや！ 自分たちがガバメントのいいなりになつとつて、後で酷い目に会つたつてメソメソ泣くんじや。もううんざりじや！

信代 ……どうしてそんなに怒鳴るんじや。以前には優しいええ子じゃつたのに。そりやあ、戦場に行つて来たけ、お前が荒れるなあしようがねえけどにやあ。

ヘンリー そういうこつちやねえんじや！

そこへ、幸次郎、帰つて来る。

幸次郎 おお、まるで、蚤の市だな。

愛子 ああ、お帰り。ヘンリーが帰って来たのよ。

幸次郎 や、や、や。帰って来たな。

ヘンリー ヘンリー・ヒライ、ただいま帰還しました。

幸次郎 おお。

愛子 ねえ、聞かせて。初めて日本に行って、まず何を感じた？

ヘンリー いろいろ驚きました。シンジユク・ステーションから電車に乗ろうとして、階段やホームを歩いているもん、日本人ぎりじや。

信代 そりゃあ、そうじゃろう。日本じゃけ。

ヘンリー でも、みんな同じ顔してるんよ。

幸次郎 そらこっちには、黒やら白やら黄色とかいろんな顔してるアメリカ人がいるわな。

信代 そう。日本は日本民族ぎりの国じゃけ。

ヘンリー お母ちゃん、お父ちゃんもあんだも、嘘つきじや。

信代 嘘つき？

ヘンリー お父ちゃんは暗いランプの下で、わしらに話しよった。わしらが行ったこともねえ日本ちゅう国がどげんビューティフルか。

信代 日本を焼け野原にしたのはUSアーミーじやろうが。

ヘンリー 日本の人たちや思いやりがあって、ジェントルで、繊細で、アメリカ人なんかと全然違うとるって。

信代　それがどうして嘘なんじゃ。

ヘンリー　わしの行っとったジャパンという国。自分のことばかり考えとるイカサマ師と、ニタニタとお
愛想笑いをする胸の薄くてずる賢いモンキーばっかじゃ。女子供に乱暴をしおって、わしたちアメリカ兵
の捨てた煙草を這いつく張って拾いよる。

信代　そりゃあ戦争に負けたんじゃけ、仕方ねえ。

ヘンリー　南の島で、わしら二世部隊は、集団自決しようとする日本の女の人たちに、死ぬることあねえ、
生きて祖国の再建せにやいけん、そう叫んだんじゃ。でも、奴らは次々と崖から飛び下り手榴弾でキル、
マイセルフじゃ。……バット、フォーマウンス、レイター。オンリー、フォーマウンス、レイターのク
リスマスにやモンペを脱いだ日本の女たちや、敵のGIの腕にぶら下ごうちよる。キャンプに戻ると戦友
たちが、前の晩に抱いたオリエントのガールの体がどげんじゃったか、事細かに報告するんよ。たまらん
ようになって、部屋に戻ってミラー見たんじゃ。ミラーん中にあの猿たちと同じジャップがおるんよ。
(泣いている) わしや日本に行つて、わしのルーツがあんな国だったって知って悔しいんじゃ！

幸次郎　(ベランダに行つて歌を歌っていた)

あなたと二人で来た丘は

海の見える丘……

ヘンリー　……せえで、ステイツに帰つて来てみりゃあ、(信代に) 愚痴ぎり言うとする日本の女がおるん
じゃ。

中国人の家主、陳さん。

愛子 あら、陳さん。家賃は払ったわよね。

陳 ……。

愛子 なあに？

陳 (そわそわとヘンリーを見る) ……マタ、アトデ。

愛子 なんか用あるんでしょ。

ヘンリー お母ちゃん。失礼しようか。

愛子 すみませんねえ。わざわざ来て貰ったのに。

信代 なあ、もっと楽しいお土産話すりゃええのに。

ヘンリー ああ、忘れとった。

愛子 なあに？

ヘンリー (幸次郎に) 妹さんから…梅干し、預かって来ました。

愛子 ヘンリー、ありがとう。彼はね、梅干し、大好物なの。

出て行く二人。

愛子 なあに？

陳 コレ、テガミ、キタヨ。

幸次郎 (受け取って) おい、佐山からだぞ。

愛子 メキシコから？

幸次郎 「ペジャス・アルテス・バレエ団にコサックダンスを振り付けました。やっと、スペイン語で授業ができるようになり……」

愛子 女のこと？

幸次郎 「このウォールデンというダンサーはアメリカ出身で、伊藤道郎と知り合いだったようです……」

愛子 メキシコじゃダンサーか。

陳 (モジモジしている)

愛子 陳さん、なあに？

陳 イイエ。アノ、チョットゴ注意シヨウト思ッテ……。

愛子 なんてしよう？

陳 アノネ、ゴミノ事……。

愛子 ごみ？ また野良猫が袋を千切ったの？

陳 イヤネ、シンブン、ゴミニ、ダシタラダメ。ストーブデ、モヤスノガイイ。

愛子 でも夏は燃やせないでしよう。

陳 デモ、ダシタラダメ。

愛子 ああ、そうなの。新聞、ごみに出したらいけないの。

陳 ソレカラ、マガジン。

愛子 はいはい。わかりました。ねえ、陳さん。

陳 ハイ。

愛子 陳さんは支那には帰らないの？

陳 シナ、イマ、センソウダヨ。

愛子 そう。国民党と共産党が戦争してる。でも、かならず共産軍が中国を解放するよ。そうしたら、支那に帰れるね。

陳 ソンナコト、イッタラ、アブナイヨ。

愛子 何が、危ないの？

陳 近頃ハFBIが野良猫ノ真似ヲスルヨウニナッタヨ。ソレデ……。

愛子 FBI？

幸次郎、立ち上がった。

陳 ハイ。アノ人ラハココニ住ム人タチノ捨テルマガジンヤペーパーヲ調ベルカラ、ゴミ回収車ニ出サナイ

ヨウ、ソウ言ウヨ。

愛子 マガジンを調べる？

陳 読ンデル雑誌デ、ソノ人ノ考エテルコトワカル、イイマス。

愛子 うちハ「ニューパブリック」と「ネイション」かなあ。

陳 ア、アア。ソレ「ニューパブリック」読ム人ハアカダツテ。

愛子 「ニューパブリック」がアカですって？

陳 ワタシ、ナニモワカラナイヨ。

幸次郎 ありがとう。陳さん気をつけるよ。

陳、去って行く。

幸次郎 愛子。

愛子 なあに？

幸次郎 日本に帰るか？

愛子 うん。

幸次郎 いつまで経っても、日本人はこの国ではよそ者だ。

愛子 そうね、帰る方がいいね。ねえ、帰って二人で日本のために頑張ろう。

幸次郎 いや、僕は帰らんよ。僕はここに残る。

愛子 (怒った) なによ。私一人帰そうっていうの？ どういう訳？ 私がそんなに邪魔？ あなたのお仕

事の邪魔になるようなことした？

幸次郎 いいや。

愛子 そんなら、どうして私だけ帰れって言うの？

幸次郎 君は帰ろうと思えば帰れる。

愛子 あなただって、帰れるじゃない？

幸次郎 いいや、僕は日本に帰るわけにはいかん。

愛子 どうして？ 日本は民主主義の国になったのよ。もう、軍部も特高警察もないのよ。

幸次郎 ……。そんなことじゃない。

愛子 だったら何よ？

幸次郎 紀州の鉄道は、波打ち際まで迫った山にしがみついて走っとる。絶壁の下は、もう荒れ狂う岸壁だ。……太地を思うたびに情けのうなる。絶壁と海との間のほんの五尺四方の猫の額のような土地に野菜なんか植えとる。ええ、ほんまに（描いて）こげん小さな空き地に畑作っとるんよ。（突然）何で紀州の梅干が旨いか知っとるか？

愛子 南国で、氣候がいいからでしょう。

幸次郎 いいや、山ばかりで畑が作れん。仕方なしに田辺ん殿様が、その山に梅の木を植えさせたんが始まりだ。

愛子 でも、鯨があつたでしょう。

幸次郎 ところがな。蒸気で走るアメリカの捕鯨船が、太平洋を越えてやって来て、熊野灘で根こそぎ鯨を捕るようになったんじゃ。根こそぎじゃ。それで、親父は船大工をやめねばなんなかつた。

愛子 ……。

幸次郎 畑もねえ。鯨も捕れん。太地のもんはどうすりゃあいい？ ええ、外へ逃げる他なかつたんよ。

愛子 ……。

幸次郎 わしらは日本に捨てられてこの国に来たんだよ。

（歌う）あなたと別れたあの夜は港が暗い夜

色褪せた桜……

愛子 あなたがいるんだったら、私もいる。（と、幸次郎を抱く）

幸次郎 今また、日本政府は中南米への移民を奨励しとるやそうやないか。
愛子 小さくなった日本に満州や外地からたくさんの人が帰って来たんですもの。
幸次郎 また、たくさん日本人が捨てられ、石ころだらけの荒れ野の開拓を始める。……国というのは恐ろしいことをするよ。

6

イーゼルの上にキャンバスはない。

ヘンリーと鶴橋。

ヘンリー ニューヨークに来とるってのに電話ばかりで、まったく顔を見せんで愛子さん、怒ったりしましたよ。

鶴橋 だいたい僕は対日講和の取材でワシントンに派遣されたんですよ。ところが着任したとたん朝鮮で戦争でしよう。国防省に就職だつて？

ヘンリー 国防省たつて、下っ端ですよ。まあ、日本語のお陰です。

鶴橋 ねえ、アメリカもなんとか和平の糸口をつかまないと、大変なことになるよ。

ヘンリー (自信を持って) コミュニストに屈しろってことですか？

鶴橋 ……人類はついに原子爆弾を手にした。今までの戦争と同じに考えたらとんでもないよ。
ヘンリー でも、このまんま行ったら、アジアはみんなコミュニズムの国になってしまいます。

鶴橋 先週、タイムズ・スクエアの防空訓練で奴を取材したよ。消防自動車サイレンを鳴らして、怪我人を担架かなんかで運んじやってさ。ニューヨークの上空で原爆が炸裂したという想定なんだって。原爆を普通の爆弾の大きいものぐらいにしか考えてないんだ。

ヘンリー アメリカ軍は広島被害の調査だとしてますよ。

鶴橋 調査結果は全部本国に持ち帰って極秘にしとるじゃないか。

ヘンリー それはソ連だって同じことをしてます。

鶴橋 原爆戦争の準備なんてきちがい沙汰だよ。……いや今日はよそう。愛子さんは？

ヘンリー おめかしの真っ最中。

鶴橋 稲垣さんは？

ヘンリー 今日も茂木プラスチック工房でおもちゃの雛形作ってるって。

鶴橋 ええ、大晦日にもおもちゃか。

ヘンリー シャンパンを買って帰るって電話あったそうです。

鶴橋 戦争前には、大晦日というところの家にみんな集まって、朝方までドンチャン騒ぎをやったんだよ。

ヘンリー そう。家具をみんな壁際に寄せてダンスパーティー。この部屋に二十人も入ったんだから。

鶴橋 また平和がやって来て、ここの部屋で再会できるとは思わなかったよ。(見て) ずいぶん持って来たね。

ヘンリー ええと、お餅と干しいたけとワカメ。

鶴橋 日本でも手に入らないよ。

ヘンリー (出して) 乾燥数の子は、塩だしせんとな。

鶴橋 幸さん、喜ぶよ。持つべきものは年来の友。

ヘンリー 持つべきものはUSエヤー・フォースの友です。ジョンソン基地から直送です。(と、台所へ)
愛子 (出てきて) お陰で、いいお正月ができるわ。鶴橋さん、あんた、ダウン・タウンを避けてたんじゃ
ない？

鶴橋 なにしろ、ホワイト・ハウスはワシントン。国連本部はニューヨーク。それを三人の特派員でこなし
ているんですからね。

愛子 もっと人員、増やしてもらえば。

鶴橋 日本は貧乏なんですよ。今、一ドル、何円かご存じですか。

愛子 ……二円かしら。

鶴橋 一ドル、三百六十円に決まったんです。

愛子 三百六十円！何よ、それ。

鶴橋 日本はね、明治以来、国民みんな汗して働いたすべてを今度の戦争にあらいざらい注ぎ込んでしま
ったんです。

愛子 鶴さん。あんた結婚は？

鶴橋 来年には、こっちに呼べると思います。

愛子 おめでとう。

そこへ「やつこらしよ」と腕に包帯をした信代。

信代 いや、婆さんにやここの階段は骨じゃ。ハッピー、ニュー、イヤー！

愛子 ハッピー、ニュー、イヤー。

ヘンリー (皿を持って出て来て) まだニュー、イヤーには三時間ありますよ。

信代 寒いなあ。もつと石炭、入りようや。

ヘンリー 日本じゃあ、木炭さえなくって、みんなボロを重ね着してますよ。

愛子 (信代の包帯を見て) あら、腕、どうしたの。

ヘンリー キャナル・ストリートで襲われたんですよ。チャイナ服なんかやめろって言うのに。

愛子 まだ、中国人やってたの？

信代 いきなり柄の悪いのが出て来おって「おめえらチャイニーズは、マオのいいなりにコミーになるのか

……」って突き倒したんじゃ。

ヘンリー 去年、チャイナにコミュニストの政権ができたっていうのに、言うこと聞かないんだから。

信代 ついこねえだまでは、ジャップが悪うてチャイニーズがよかったんじゃけど。

愛子 ヘンリー、近頃、アメリカ、おかしいんじゃない？

ヘンリー 何がおかしいんですか？

愛子 アメリカって自由主義の国でしょう？

ヘンリー そうですよ。

愛子 アメリカが作った日本の憲法だって、思想、信条の自由は保証されているのに。コミュニズムだけを

なんでペストのように嫌うのよ？

鶴橋 うん。アメリカ国民は、もう戦争に飽き飽きしてるからね。狼が攻めて来るって叫ばないと朝鮮で戦

争ができませんからね。

ヘンリー いいえ、それは違います。コミュニズムは人間の自由を否定する思想なんじゃ。だから、やっつけなきゃあならんです。

鶴橋 まあ、君たちアメリカ人がどう思おうとそれは勝手だ。しかし、それを日本にまで押し付けることはないだろう。

ヘンリー (むきになって) あんた方、日本人は……。

信代 ちょっと、ニューイヤ・パーティーなんじゃから。

鶴橋 そうだった。ここは特別の場所だったんだから。

そこへブザー。

愛子 あら、誰かしら？

入って来たのは、光子。

愛子 あら、姉さん。こんなに遅くどうしたの？

光子 ご亭主は？

愛子 いつもの通り、アルバイト。大晦日だって言うのにな。

光子 そう。(と、ヘンリーを見る)

鶴橋 ご主人、大使館に赴任されたとか。おめでとうございます。

光子 はい。

鶴橋 講和会議の根回しですか。大変ですね。

愛子 日本はもう一度、国際社会に入れてもらえるの？

ヘンリー 問題は米軍が撤退したら、ファー・イーストに軍事的空白ができるってことです。ところが、日本の再軍備は頭が痛い。

愛子 フッフ、ヘンリーもむずかしいこと言うようになった。

鶴橋 ねえ、独立国家なら、自国の防衛をする権利はあるでしょう。

ヘンリー ではお聞きしますがね。日本の軍隊は日本の国民を敵から守ったことがありますか？

鶴橋 日本は国を守るために力の限り戦いましたよ。

ヘンリー NO！ 日本の軍隊はよその国に攻め込んだことはありません。バット、満州では開拓民を残して逃げました。唯一の地上戦のあった沖縄では日本の軍隊は沖縄の住民を虐殺しました。日本の軍隊は、自分の国民を守ったことは一度もありません。

信代 ちよっとせっかくのお正月なんだから……。

ヘンリー 戦争の末期に、アメリカ国務省内で、意見が対立したんです。

鶴橋 どんな？

ヘンリー ドイツと日本を五十年は工業化できない三流の農業国にしてしまおうか。

信代 お前、そんなアメリカ人みたいな口のきき方するもんじゃないよ。

ヘンリー しかし、ドイツと日本は、ソ連からの侵略を防ぐ防波堤になりうる力があるという意見が勝つて、アメリカは両国の経済の立て直しに莫大な援助を始めたんです。

光子 失礼ですが、今日はちょっと妹と話があるので、お引き取り願えませんか？
ヘンリー？

愛子 ちよつと姉さん。

光子 家族の重要な話があるものですから。それで、私、ワシントンから来たんですから。

愛子 姉さん、私たちは長いお友だちなよ。そりゃあたまには……。

光子 帰っていただきなさい。

鶴橋 それじゃあ、私も。

光子 いいえ、あなたには、いていただいた方がいいと思います。

ヘンリー 母さん、帰ろう。

信代 ああ。

愛子 すみませんねえ。せっかくパーティーをしようというのに。今日は本当にありがとう。

信代 よいお年を。

愛子 来年もよろしく。

信代 (出て行きながら) 日本人だって今度ノーベル賞取ったんじゃないからなあ。

二人、去って行く。

愛子 姉さん、失礼だわ。ヘンリーはね。

光子 あの人はアメリカ人。

愛子 だからって……。

光子 アメリカ人は合衆国に忠誠を誓わなくてはならないの。

愛子 だからって……。

光子 FBIから何の接触もなかった？ 何かあったでしょう。

愛子 大したことじゃないわ。

光子 (声を潜めて) あんたんところの電話、おかしいと思わない。雑音が入ったり、変よ。

愛子 先月、連邦裁判所から呼び出しがあったわ。

光子 それで？

愛子 二十年も昔のことを聞くのよ。「ジョン・リード・クラブ」に出入りしてた人物の名前を教えろっ

て。もちろん、覚えていませんってつっぱねたわ。

光子 そんなことで済むと思ってるの？

愛子 ここにもFBIのバツカムって男が。

光子 そうでしょう。情報関係の男から言われたわ。気をつけた方がいいって。あんたたちの名前が出てる

って。アグネス・スメドレーとゾルゲ事件の関係だね。

愛子 FBIは昔アグネスと親しかったさんから何かを聞き出そうとしているの。

鶴橋 そりゃあ、とても危険だよ、あなたたちは……。

愛子 ……。

光子 あんた、マッカーシーのこと知ってるでしょ？

鶴橋 マッカーシーが「国務省には共産党員が紛れ込んでいる」って根も葉もない演説したとたんこの騒ぎだ。

光子 甘くみちやあ駄目よ。

愛子 甘くなんか見てないわ。調査委員会によって、ダシル・ハメットは投獄され、ローゼンバーグ夫妻は電気椅子に送られようとしている。でもね、自由の国アメリカでそんなことが罷り通っていいの？ おかしいことはおかしいうって言わなけりやあ。

光子 あなたはね、日本人なの。ね、アメリカのことはアメリカ人にまかせなさい。あなたは国家っていうものがどんな恐ろしいものか知らないから……。

愛子 東京ローズに懲役十年の判決が出たことは知っています。

鶴橋 それよりもっとひどい事件があるんだ。ある日系二世が日本で教育を受けようと帰国したとたん戦争になった。彼は日本国民として徴用され、英語ができるのでアメリカの捕虜収容所に通訳として雇われた。戦争が終わって、アメリカの家族の元に戻りたい彼に、アメリカ領事館は、そりゃあ君の国籍はアメリカなんだからと言い、四七年にカリフォルニアに帰国したんです。ところが、偶然、彼の働いていた収容所に入れられていた米兵と故郷の町でばったり会ってしまったんです。で「こいつは日本軍として働いていた」って訴えたんです。三月、ロサンジェルズ地方裁判所の判決が出ました。国家反逆罪で、死刑の判決です。

愛子 死刑？

鶴橋 カリフォルニアですから、ガス室でしょう。

愛子 (立ち上がった) 幸さん、遅いなあ。

鶴橋 彼が唯一間違っていたのは、戦後、アメリカに帰ろうとしたことです。

愛子 この間から、手紙の封印のところにスコッチ・テープが貼ってあるの。

光子 それごらんさない。スターリンと同じ。

愛子 でもアメリカはちがうわ。

光子 どうちがうの？

愛子 だってこの国は、全世界の虐げられた人たち、貧しい人たちが作った国なのよ。その人たちの自由と平等のために……。

そこへ、電話が鳴るのでビクツとする。

愛子 (電話に) ハロー。ああ、あんた。……ええ！ ……バツカム。それで？ うん……よかった。姉さんが心配して来てくれてるの。鶴さんもわかりました。(電話を切る)

光子 FBIね？

愛子 うん。茂木工房で逮捕されて、四時間、取り調べを受けたって。

沈黙。

愛子 今から地下鉄に乗るって。

鶴橋 (ほっと溜め息をついて) よかったよ。

愛子 コロンバスサークルだからすぐよ。

沈黙

愛子 とんだニュー・イヤーズ・イブね。(グラスを出す)

鶴橋 とりあえず、一杯やりながら待ちますか？

光子 愛子。私はもう国家について議論するつもりはないわ。それで一つ提案んだけど、こうは考えられない。この国は、いま、病気なんだって。

鶴橋 たしかに病気だよ。

光子 アメリカという国は、言葉もルーツもカルチャーも違う人たちが集まって作った国でしょ。異質な人達と一緒に生きて行くには何が必要？ それはね、同じ理想を持つことなの。みんなが額に汗して働けば、もしかしたら世界一豊かな国になれるかもしれない。その理想を信じてこの二百年、生きて来たのよ。

鶴橋 言い方変えればね。この国を団結させて来たのは、同じ敵を憎むこと。開拓時代、アメリカ人の敵は、この大陸の自然とインディアンだった。その征服が終わった時、アメリカ人は共通の敵を見失ってしまった。そこでアルコールという敵を発見した。アメリカ人すべてが幸せになれないのは、この国に酒飲みがいるせいだ。そこで例の禁酒法だ。ギャングたちが栄え、十年経ってその愚かさに気づいた時に、いい具合にファッシズムという格好の悪者が現れた。

愛子 そして、ファッシズムを打ちのめして、今度はコミュニズムってわけ？

鶴橋 そう。全世界の Kommunismus 国家を撲滅するにはかなりの時間がかかるだろう。アメリカの国民の結束は、まだしばらくは安泰というわけだ。さてその次の敵は、麻薬かな。そう煙草の害だってある。

光子 ともかく、今は、病気の国からは離れたほうがいい。

愛子 ……。

光子 もう、頑張るの、やめなさい。アメリカはあなたの思っているような国じゃない。

鶴橋 スターリンのソ連と同じです。

光子 昔ならね。こんなことがあっても、うちの人に頼んでなんとかしてあげられた。でも、今、日本はアメリカの占領下にあるのよ。

愛子 ……。

光子 あんたたち、こっちにお墓買う？

愛子 お墓？

光子 安い墓地が売りに出ているの。日本に帰らないんだったら、お墓、買いなさいな。

沈黙。

階下のピアノが聞こえて来た。

愛子 FBI から、呼び出しを受けてから、お友だちのほとんどが電話をかけて来なくなったの。外で偶然会っても、私たちの姿を見ると道の反対側に渡って行くの。

光子 そうでしょう。

愛子 私はいいのよ、帰っても。いえ、帰りたいの。でも、あの人、日本にいたのは十五年、アメリカに四十年。このアメリカで絵を学んで、このアメリカに生きる人たちを描いて来たの。この土地に根が生えちゃったの。無理やり抜くと枯れちゃうの。今さら、何の足場もない日本に帰ったら、絵描きでもなんでもないの。だからあの方はここで頑張ってきたの。だから私も……。帰って来たあ！

幸次郎、入って来る。

愛子 大丈夫だった？

幸次郎 四時間、いじめられたよ。(二人に) ああ、ご心配かけました。

愛子 あのね、ヘンリーがいろいろ持って来てくれたの。お腹空いたでしょう。

光子 それで移民局はなんて言ってるの？

幸次郎 アグネス・スメドレーとつき合っていた人間を何人か言えば釈放するって。

愛子 あんた、言わなかったわよね。そうよね。

幸次郎 もちろん。

愛子 そうしたら？

幸次郎 三カ月以内にこの国を出て行くなら、釈放しようって。

愛子 国外退去？ 私たちがこの国に何をしたら言うの？ おかしいわよ、そんなの。

幸次郎 君はいつも元気だなあ。従わないと、拘留されるよ。僕はもう体が持たん。

愛子 でも幸さんはどうするの？

幸次郎 残念だが、力がなくなった。キャンバスに思った通り線が引けない。いや眼鏡のせいじゃないんだよ。息をつめて絵筆をグーツと持って行っても、根気が続かない。……いやこんなことじゃだめだ。愛子は頑張っているんだ。そう思って……。そう思ってこの三年頑張ってきたよ。佐山の手紙を愛子が読む。

「このメキシコに、民衆のための演劇を根づかせるために闘っています」俺も頑張らにやあいけん。そう思って……。だが十五分集中することもできん。たったの十五分だよ。

愛子 もういいわ。絵なんか描かなくていい。

幸次郎 (光子に) ご心配をお掛けしましたが、船が取れ次第帰ります。

光子 わかりました。日本側の問題ではお手伝いできると思うわ。

幸次郎 お世話になります。

鶴橋 それがいいですよ。

光子 さて、じゃあ私は失礼するわ。

鶴橋 あーあ、こんな時間です。

幸次郎 鶴橋君、ありがとう。

鶴橋 (支度を始めながら) ねえ、松の取れないうちに壮行会を開こうよ。

幸次郎 壮行会ってのは変だな。

光子 (メモを渡して) ホテル、ここだから。

愛子 姉さん、ありがとう。

光子 よいお年を。

二人、出て行く。

幸次郎 FBIに聞かれたよ。

愛子 ？

幸次郎 ソ連に潜入していた佐山と連絡を取っていたなって。……すまん。

愛子 何が？

幸次郎 僕は一瞬、君を疑った。君がFBIに追い詰められて喋ったんじゃないかって。佐山が言っていたらう。ソ連じゃあ、妻が夫をKGBに告げ口するようになったって。……それを思い出して、それからこんな国にいちやあいけないうって思った。……友人や家族が信じられなくなったらおしまいだ。

愛子 佐山さんとは二、三度会っただけですって答えておいたけど？

幸次郎 僕もそう言っただけです。そうしたら、向こうはモスクワからの絵葉書を出して来た。

愛子 エルミタージュ美術館の。

幸次郎 そうだよ。あれだよ。

愛子 ヘンリーが欲しいって言った？

幸次郎 そういうことだ。

愛子 ……信じられない。なんでヘンリーが……。

幸次郎 あいつにとってはそうすることが国家に対する忠誠だったんだろう。

愛子 ……。

幸次郎 それから、ソ連からの指令を受けるために、佐山からショート・ウェーブのラジオを受けとり密か

に聞いていたって。これ以上ここにいと、僕は「ジョン・リード・クラブ」の昔の仲間たちのことを、喋ることになる……。

沈黙

愛子 幸さんや。

幸次郎 ホイホイどうした。愛さんか。

愛子 たとえ日本に帰^{けえ}っても、この国の悪口言っちゃあいけねえぜ。

幸次郎 ほら、そりやまたどうしてだい。

愛子 お前さんが、こちらさんに草鞋を脱いだは十五年。それから数えて四十年。世間との辻褃合わせも知らぬ小僧っ子に、絵の描き方から借金の逃げ方、果ては女のだまし方まで、丁寧^{おせ}に教えてくれたなあ、こちらさんだあ。

幸次郎 そう。あたしの歯がめっぼう強いのも、餓鬼の頃、カリフォルニーで、堅い豆ばかり食わしたこの国のお陰だあ。

愛子 そう。懐の広い国ですよ。

幸次郎 鬼畜米英だった頭の悪い小僧たちが、今度は揃ってアメリカカ万歳になったら気持ち悪いなあ。

愛子 あっしらだって日本に帰ったら、あの苦しかった十五年の戦争から、逃げていたって言われるぜ。

幸次郎 まあ、そうなんだから仕方あるまい。

そこへ、ノックの音。

愛子 ああ、ぎょうざだ。

陳 (入って来て) ゴメイトウ。

愛子 今年も、ぎょうざ持って来てくれたの？

陳 コトシハネ、チョウナンノヨメガ、ツクツタカラ、ウマイカドウカ、ワカラン。

愛子 あら、息子さんにお嫁さん来たの？

陳 ハイ。マゴモデキタヨ。

愛子 ねえ、陳さん。私たち日本に帰ることになったの。

陳 アア、ニホンニカエルカ。

幸次郎 陳さんは中国には帰らないのかい？

陳 ウン、カエリタイネ。

愛子 じゃあ、帰れば。中国は解放されたのよ。

陳 ウーン。ソウネ。デモ、モチョットココニイルヨ。

愛子 毛沢東、嫌い？

陳 エエ、ナアニ？

愛子 毛沢東、嫌い？

陳 アノネ、チンサン、トシトツテ、ミミ、ワルクナッタヨ。

愛子 だからレッド・チャイナには帰りたくないの？

陳 エエ？

幸次郎 もう、やめろ。陳さん。このラジオ、あげよう。

陳 エエ、ソノラジオ。チンサンニクレル。

幸次郎 ほら、聞こえてるよ。

陳 謝謝。^{シエイシエイ}イナガキサン、イイヒトダ。

愛子 本当にお世話になったね。謝謝。

陳 再会。^{ツアイツエン}

愛子 再会。

陳、出ていく。

愛子 けどよ。幸さん。もし、もしもよ。

幸次郎 なんてえ？

愛子 (食卓に皿を並べた) もしも将来、日本がアメリカみたいに自由で豊かな国になったらよ。

幸次郎 なるかねえ。

愛子 だからもし、って言ってるじゃない。もし、そうなって、貧しい国のアジアの人たちが日本にどつとやって来たら、アメリカみたいにおおらかに受け入れると思う。

幸次郎 そうだなあ。アジア系の移民は、金稼ぎのためにだけこの国に来たって言うけど、もしかしたらこの国はそれを望んでいたのかもしれないなあ。つまり、欲しいのは安い労働力だけ……。おい。

愛子 なあに？

幸次郎 手を出してごらん。

愛子、手を出す。

幸次郎 新年のお祝い。

愛子 (見て) 今年はなあに？

幸次郎 首飾り。

愛子 ティファニーの？

幸次郎 いいや。日本製の真珠だよ。二十五年、ご苦労様。

愛子 ありがとう。四十年、ご苦労さまでした。

幸次郎 おい、アメリカ最後のお正月だ。陳さんのぎょうざを食おうぜ。

愛子 ちよっと待って。今、用意するから。

愛子は台所に行き、幸次郎はラジオのレシーバーを付けた。

幸次郎 (ラジオの歌に合わせて)

今日も暮れ行く異国の丘に

友よ辛かる苦しかる

我慢だ待ってろ

嵐が過ぎりや……

愛子、大きな皿を持ってやって来て幸次郎を見る。

愛子 もう、日本ではもう元旦の朝か。お宅のお雑煮は何です。ぶりなんです。大根や里芋なんか野菜がた
くさん。お祖父さん、お餅に気をつけてくださいよ。喉に引っ掛けて死んだ老人が毎年出るんですから
ね。

教会の鐘が鳴りはじめる。

街から「蛍の光」が聞こえて来る。

愛子 もうしばらくで、昭和二十五年が終わります。この年、どちらさまもご苦労さまでした。そして次に
やって来るのが一九五一年。私たちの二十世紀は、今、ちょうど折り返し点を回ったところですよ。前半の
五十年、半世紀は、まあ、いろいろなことがございました。……二度の世界戦争、それからロシアの革
命。この残酷な世界を愛と慈しみの社会にしようと命を賭けた者たち。愛するもののために命を捧げた人
たち。思い半ばで倒れた仲間たち。……人間というのはものすごく勇気があって、そしてとっても残酷な
んですねえ。でも、私は諦めませんよ。私の知り合いに、世界各国を放浪しているお芝居の演出家がいま
す。その人はこう言っていました。人間は、それぞれの時代を背負わされて生まれて来てるんだって。で

すからみなさん、これから私たちの二十世紀の残りの半分にご挨拶しましょう。ハッピー、ニュー、イヤ
ー。……こちらニューヨーク、マツハツタンアイランドからの最後の交信です。
(幕)

底本.. 『朝焼けのマンハッタン・はつ恋』 三一書房

1995 (平成7) 年10月30日発行・第一版

ISBN9784380952920